

2017年度

「学生による授業評価アンケート」
報 告 書

2018年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2018年 9月

これまでに発行した『学生による授業評価アンケート報告書』は、大学教育開発・支援センターの Web サイトより閲覧いただけます。下記 URL または QR コードへアクセスし、「刊行物」から「学生による授業評価アンケート報告書」を選択してください。

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>



高い研究力が担保する充実した教育力の実現に向けて

総長 郭 洋春

本学における「学生による授業評価アンケート」は、2017年度で14年目を迎えました。この間、多くの教職員の皆さんの努力により改善が重ねられ今日に至ることができました。ここに改めて感謝いたします。今では当たり前のように行っている授業評価アンケートもここまで定着するには、多くの教職員の理解と協力があったからだ感謝いたします。こうしたたゆまぬ努力が、「THE 世界大学ランキング日本版 2018」教育充実度ランキングにおいて私立大学7位（国公立大学全体で19位）という好評価を得ることにつながったのだと思います。私たちはこの結果に満足せず、これからも教育の向上を目指していきたいと思えます。

言うまでもなく大学の教員は教育者であり、研究者であります。従って、大学の教育の水準は、研究の質が高まれば高まるほど質の高い教育が行われるといてもいいでしょう。現にこの間の本学の研究の質の高さを図る指標として、科学研究費助成事業における「研究者が所属する研究機関別採択率（2017年度新規採択分）」で本学は36.2%であり、私立大学だけに限ると4位に位置しました（全体では14位）。また、『日経トレンディ』2018年9月号の「教育・研究力ランキング」で本学は私立大学で4位（全体で23位）にランキングされました。特に、「海外との連携を示す国際共著論文率」では全体で6位、さらに論文のインパクトを示すFWCI（Field Weighted Citation Impact：相対被引用率）では全体で8位となっています。これには理学部（特に物理学科）の貢献が大きいです。文系中心の総合大学である立教大学が主要大学を抑えて上位に位置付けられたのは十分に誇れることでしょう。こうした高い研究力があるからこそ、質の高い教育が行われているのです。

さらに本学の教育充実度が高い理由は、第一に効果的教育ができるようすべての教室にインターネット環境はもちろん、教育に必要な設備を配置していること。第二に専任教員はもちろん兼任教員の授業にもTA・SAを配置できるようにしていること。第三に成績評価調査制度を導入し、成績評価に対する厳格性・透明性を担保していることなどがあげられるでしょう。こうしたハード・ソフト両面における授業環境の整備は他大学に誇るものがあります。

本学の授業評価アンケートの特徴は、第一に3年に一度全教員を対象にアンケート調査を行うことで、幅広い科目に対するFD（Faculty Development）の向上を図っていること。第二にアンケート結果については大学教育開発・支援センターを中心に分析を行い、科目担当者・学部等に集計結果のフィードバックを行い、担当者からは結果に対する回答を得ていること。第三にアンケートの分析結果・所見票・報告書を幅広く公開していることです。こうした特徴こそ、常に教育の質を向上させてきたといえるでしょう。

一方で、授業環境については改善すべき課題も残されています。それは履修者数に対する適正な教室規模や空調機能問題、そして最大の課題が授業中の学生による私語です。特に授業中の私語問題は日本の多くの大学が抱える問題です。これらの諸課題についても今後改善していかなければなりません。

本学はこれまでも、そしてこれからも高い教育力の実現に向けて努力していきます。そのためにも教職員、学生の皆さんのさらなるご協力をお願いします。

目次

はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
1-5 回答結果の全学的な活用に向けて	5
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	13
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	21
4-1 文学部	22
4-2 経済学部	25
4-3 理学部	28
4-4 社会学部	31
4-5 法学部	34
4-6 経営学部	37
4-7 異文化コミュニケーション学部	41
4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター	44
4-9 観光学部	46
4-10 コミュニティ福祉学部	49
4-11 現代心理学部	52
4-12 全学共通カリキュラム運営センター	55
4-13 学校・社会教育講座	62
5. 2017年度のまとめと今後の展望	65
6. 2017年度集計データ（資料編）	67
6-1 回答者数・回答率	67
6-2 学部等別平均値	68
6-3 「グループ集計」科目一覧	81

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における「学生による授業評価アンケート」は、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1-1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.18参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメ

ントを通してその内容を明らかにすることを求める。

- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合っ、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より抜粋)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、「学生による授業評価アンケート」開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1教員1科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた(2007年1月25日、部長会)。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議(2009年11月19日)において、2010年度以降の

基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3 年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010 年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

- ・ 2010、2013、2016 年度：「1 教員 1 科目」
- ・ 2011、2012、2014、2015、2017 年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2017 年度の各学部等における科目選定方針については、「2 - 3 各学部等の科目選定方針 (p.11)」を参照されたい。

1 - 5 回答結果の全学的な活用に向けて

本学は、従来、1 - 1 に記載した目的に沿い、「学生による授業評価アンケート」の集計結果を教員個人の授業改善や、学部等による FD の基礎資料として活用してきた。しかし、回答データを計量分析し、全学的な FD に活用するには至っていなかった。

そこで、2012 年度 10 月に発足した大学教育開発・支援センター教学 IR 部会では、2015 年度に 2013 年度の回答データを用いた分析を実施し、「教員の授業に対する工夫や努力、たとえば、各回の授業内容を明確に提示するよう意識するなどの取り組みによって、学生の授業や学習に対する意欲は高められる」という知見を得、教育改革推進会議を通じて全学へ報告し、共有した（詳細は、2015 年度報告書に掲載）。

上述の知見を踏まえて、2017 年度に行われた第 1 回「立教大学 教育活動特別賞」の選定にあたっては、2016 年度授業評価アンケートの一部の項目の集計結果を各学部等へ提供した。各学部等からの候補者の推薦を受けて、最終的に 34 名の方々に賞を授与している。

2018 年度は、受賞者の教育に関する優れた取り組みを共有するために、全学の FD 活動（シンポジウム等）を展開しているところである。

学生がアンケートに回答するにあたり相当な負担を被っていることを肝に命じ、今後もこれまで以上にその結果の活用に努めたい。

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター、全学共通カリキュラム運営センター、学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部等を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5 段階による評価方式の設問を 23 設問、記述による評価欄を 2 箇所構成とした（pp.8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2017 年度は、文学部（2 設問）、経済学部（6 設問）、理学部（4 設問）、現代心理学部（3 設問）、全学共通カリキュラム運営センター（6 設問）が学部等による設問項目を設定した（p.10 参照）。

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目等の表記について

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目は、2016 年度入学者より「全学共通科目」として開講しています。

本報告書においては 2016 年度以降入学者用の名称を用いて記載しています。

<本報告書における表記>

- ① 科目の開設学部等を示す場合 : 「全学共通カリキュラム運営センター」
- ② 開設科目の総称を示す場合 : 「全学共通科目」
- ③ ①または②を略して示す場合 : 「全学共通」

2017年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U) (W)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特外)
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴講)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (その他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した		⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 聞きやすい話し方だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた		⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない ⑨	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない ⑨	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) わかりやすい授業だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた		⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した		⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

経済学部

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
 - 2) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
 - 3) (基礎ゼミナール1) レジюмеやレポート作成の力がついた
 - 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
 - 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
 - 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた
- ※情報処理系科目とは、情報処理入門1を指す

理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

全学共通カリキュラム運営センター

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた
- 5) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた
- 6) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③ 科目コード登録 ② その他 ① 覚えていない

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通科目および学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通科目の言語系科目を除いた科目とした。

2017年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細はp.5参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文 学 部	(1) 各学科・専修の導入教育(初年次教育)科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経 済 学 部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則春学期に実施する。ただし、通年科目は秋学期に実施する。また過年度通年科目であった経済学1・2は、春・秋学期で担当教員が異なるため春・秋学期に実施、簿記1・2は同一教員のため秋学期のみに実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目についてアンケートを実施する
理 学 部	(1) 数学科では新カリキュラム(2010年度より移行)の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定点観測(毎年、同じ科目で調査)を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を選定する。経年変化を見るために、なるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する。ただし、講究は受講者が少ない場合が多いので、担当者の希望がある場合のみ実施することにする (3) 化学科では原則として、必修講義科目ならびに選択講義科目(複数教員担当科目を除く)の経年変化を調査するために、毎年同じ科目についてアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2017年度も同じ科目についてアンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社 会 学 部	(1) 必修科目はすべて実施する (2) 「講義科目」については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う
法 学 部	(1) 3年に1回全教員(専任・兼任)について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※2017年度は(2)に該当する
経 営 学 部	「演習」を除く全科目で実施する。ただし、科目特性を考慮して、独自にアンケートを実施する科目については、当該アンケートの実施対象に含めない
異文化コミュニケーション学部	必修科目の講義科目のうち学部が必要と考える、同一科目で複数コマ開講する科目および今年度新規開講科目
グローバルリベラルアーツ・プログラム運営センター	履修者5名以下となる演習系科目は実施対象外とする
観 光 学 部	(1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する (2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (3) 複数教員担当科目は対象としない (4) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 学部専任教員(助教含む)1科目以下の実施を原則とする (2) 資格科目を優先する (3) 演習科目は対象外とする (4) 昨年度実施科目を優先する

学部等	科目選定方針
現代心理学部	(1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目(旧カリ「総合展開科目」)」全科目 (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」 (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」 なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない
全学共通カリキュラム運営センター	本学で開講される学びの精神、多彩な学び 1～5 カテゴリの講義系の全科目、および多彩な学び・6 カテゴリで開講するグローバル教育センター提供科目を対象とする。 学びの精神、多彩な学び 1～5 カテゴリは、担当する 1 教員(専任・兼任)1 科目の実施とする。 多彩な学び・6 カテゴリで開講するグローバル教育センター提供科目は、本学で開講される全科目で実施をする。
学校・社会教育講座	(1) 履修者 5 名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目 1 教員 1 科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する

2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 564 科目、秋学期 480 科目、合計 1,044 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 574 科目、秋学期 484 科目、合計 1,058 科目であったので、全学の実施率(実施科目数/実施予定科目数)は 98.68% (1,044/1,058)、所見票提出率は 82.66% (863/1,044) となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文 学 部	134	64	70	134	64	70	107	50	57
経 済 学 部	70	55	15	69	54	15	69	54	15
理 学 部	101	50	51	101	50	51	92	45	47
社 会 学 部	118	57	61	117	57	60	93	48	45
法 学 部	8	4	4	8	4	4	7	3	4
経 営 学 部	103	57	46	101	55	46	62	37	25
異文化コミュニケーション学部	17	12	5	16	11	5	14	9	5
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	9	3	6	9	3	6	8	3	5
観 光 学 部	47	23	24	44	20	24	36	15	21
コミュニティ福祉学部	32	13	19	32	13	19	26	11	15
現代心理学部	31	10	21	30	9	21	23	7	16
全学共通カリキュラム運営センター	337	190	147	332	188	144	280	163	117
学校・社会教育講座	51	36	15	51	36	15	46	33	13
合 計	1,058	574	484	1,044	564	480	863	478	385

2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第1週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

春学期：2017年7月6日（木）～7月19日（水）

秋学期：2018年1月10日（水）～1月23日（火）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、延べ履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	6,333	4,226	4,677	3,109	11,010	7,335
経 済 学 部	2,972	2,493	1,494	1,039	4,466	3,532
理 学 部	3,588	2,408	3,177	1,947	6,765	4,355
社 会 学 部	9,014	5,574	8,499	4,507	17,513	10,081
法 学 部	917	353	877	370	1,794	723
経 営 学 部	7,329	4,306	6,632	3,263	13,961	7,569
異文化コミュニケーション学部	476	415	317	277	793	692
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	79	41	73	57	152	98
観 光 学 部	3,025	1,834	3,660	2,518	6,685	4,352
コミュニティ福祉学部	1,472	1,074	1,663	1,162	3,135	2,236
現 代 心 理 学 部	985	670	2,604	1,836	3,589	2,506
全学共通カリキュラム運営センター	21,938	14,951	15,383	9,716	37,321	24,667
学校・社会教育講座	1,962	1,575	453	344	2,415	1,919
合 計	60,090	39,920	49,509	30,145	109,599	70,065

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、Web上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。

所見票閲覧システム URL <http://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomubu/etsuran/top.html>

※閲覧にあたってはV-Campus ID／パスワードが必要



3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の以下の集計結果をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載し、これらを基に、科目担当者に所見票（p.18にサンプルを掲載）の執筆を依頼した。

- ・集計結果票（p.17にサンプルを掲載）
- ・「記述による評価」一覧票
- ・アンケート元データ

3-2 学部等

以下により集計し、2)の結果と科目担当者が執筆した所見票を送付の上、学部等総評の執筆を依頼した。

1) 集計の方針

集計の方針は、以下のとおりとした。

- ①学部等別・学科等別に集計する。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計実施の有無は、学部等の判断に委ねる。
- ③科目選定方針が「学部等の必要性に応じた選定」である本年度は、全学集計は行わない。また、全学部等間の設問項目別平均値の一覧表は作成しない。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者数を学部等別、学年別に集計した（合計も記載）。また、アンケート実施科目について学部等別の回答率（回答者数/履修者数）を算出した（p.67参照）。

②平均値に関する集計

平均値に関する集計は、下表のとおり行った。

集計単位 提供した 集計データ	学部等別 ^{*1}	学科等別 ^{*1}
設問項目別	● ^{*2} (pp.68-80参照)	●
学年別	●	●
授業規模別	●	●

*1) 学部等には、当該学部の結果を提供

*2) 学部等には、設問項目別に回答割合を示した帯グラフも提供

なお、2013年度より、アンケート設問項目の「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

・ I 1) 出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

・ I 6) 授業時以外に学習した時間

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、
「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

③設問項目間の相関

全設問項目間の相関係数を学部等別、学科等別に算出した。特に「IV4) この授業を受けて満足した」と他の設問項目との関連の強弱を明示した。学部等には、当該学部の結果を提供した。

④グループ集計（実施学部のみ）

グループ内の科目間を比較するデータとして、設問項目ごとの科目別回答割合を示す帯グラフ（p.19 にサンプルを掲載）、科目別平均値一覧表およびレーダーチャート（p.20 にサンプルを掲載）を提供した。

サンプル <科目担当者へ通知する集計結果票>

2017年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時間	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	90.71	*1
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	0.72	*2

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91	
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00	
5) 十分な静粛性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05	
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6	5	3.47	
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5	4	3.11	
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98	

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22	
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31	

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09	
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14	
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	

次ページ以降に、「記述による評価」一覧票を表示します

*1) 「5:90%以上」=100 「4:70%~89%」=80 「3:50%~69%」=60 「2:30%~49%」=40 「1:30%未満」=20として平均を算出
 *2) 「5:3時間以上」=3.5 「4:2~3時間」=2.5 「3:1~2時間」=1.5 「2:1時間未満」=0.5 「1:0時間」=0として平均を算出

サンプル <科目担当者が執筆する所見票の書式>

2017年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価01 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー

*「-」は「該当しない」も含む

授業評価に対する担当教員の所見

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5.3時間以上 4.2~5時間 3.1~2時間 2.1時間未満 1.0時間)

記述による評価に対する担当教員の所見

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な静粛性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文庫が効果的だった
- 7) 板書のしかが適切だった
- 8) 映像教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

改善に向けた今後の方針

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思えますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

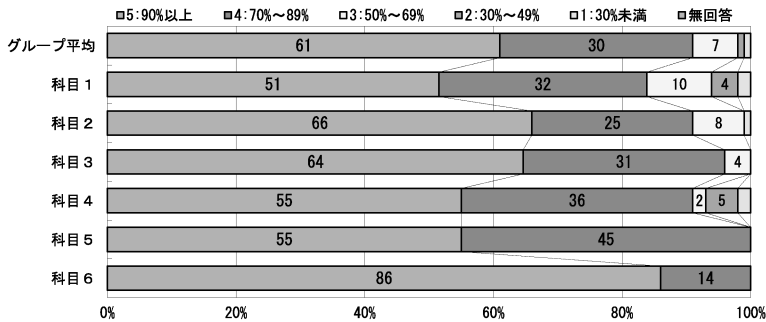
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

サンプル <学部等へ通知するグループ集計結果（実施学部は pp. 81-86 参照）>

1) 設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 0:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

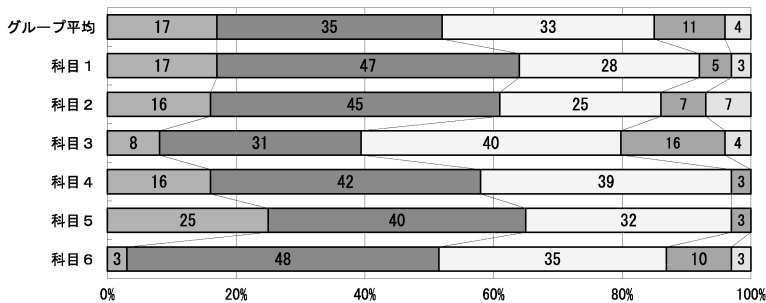
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*1	平均*2	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目 1	19	96.90	-
科目 2	15	96.00	-
科目 3	20	95.67	-
科目 4	21	97.87	-
科目 5	18	86.89	-
科目 6	20	92.22	-

*1 「無回答」は除く
*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

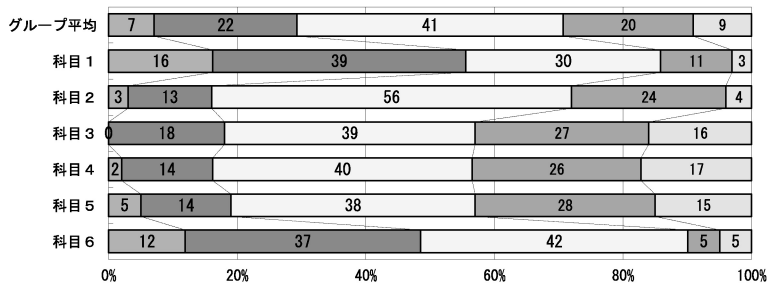
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目 1	18	3.72	-
科目 2	15	3.69	-
科目 3	20	3.20	-
科目 4	21	3.78	-
科目 5	18	3.90	-
科目 6	20	3.46	-

* 「無回答」は除く

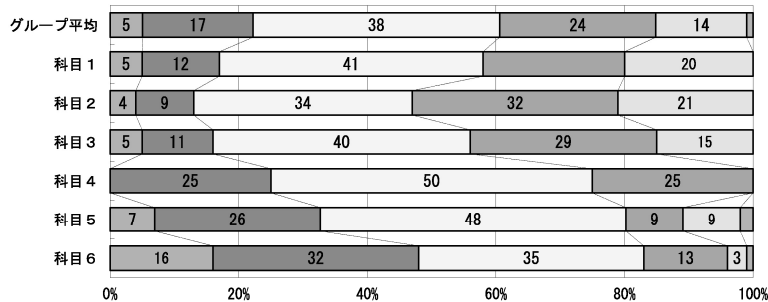
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目 1	19	3.58	-
科目 2	15	2.76	-
科目 3	20	2.65	-
科目 4	21	2.63	-
科目 5	18	2.93	-
科目 6	20	3.67	-

* 「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



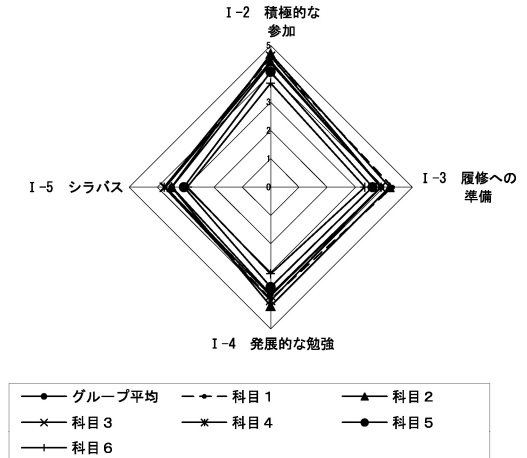
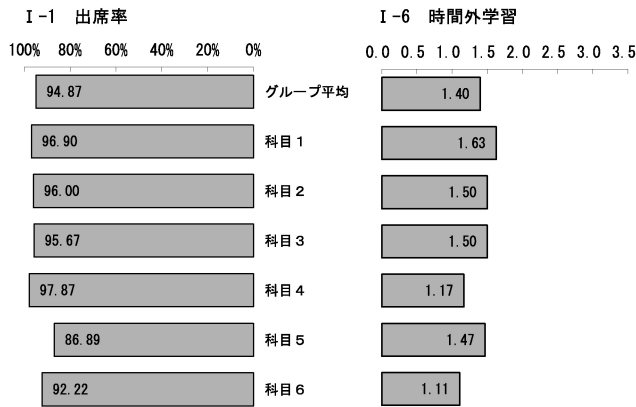
	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目 1	19	2.60	-
科目 2	15	2.42	-
科目 3	20	2.67	-
科目 4	21	3.09	-
科目 5	18	3.12	1
科目 6	20	3.56	1

* 「無回答」は除く

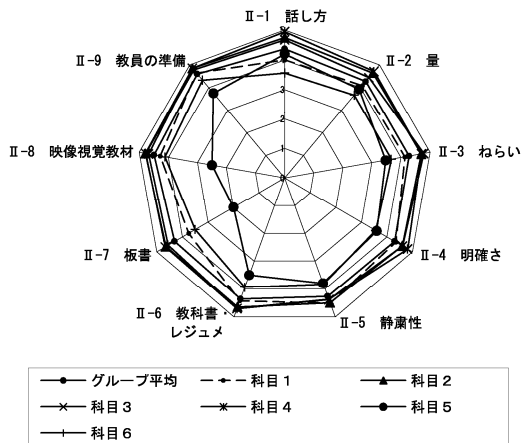
2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

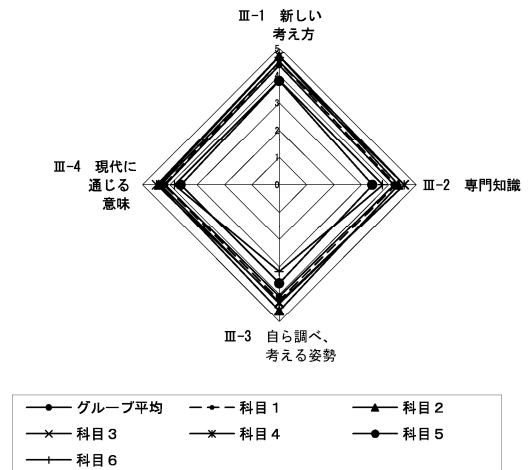
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



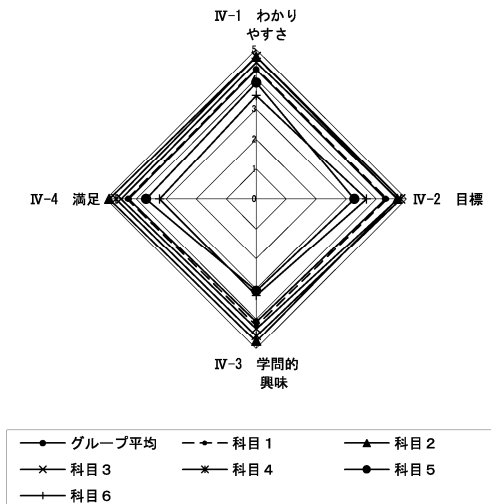
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（学生の意見に関する内容を含む）
4. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2017年度については、導入ならびに基礎科目を中心として調査を行う方針を立て、以下の科目を選定した。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目

- ①1年次必修科目
- ②1年次で履修可能な科目
- ③2年次必修科目
- ④2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

なお、学部による設問項目については、前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は合計134科目で、内訳としては春学期64、秋学期70科目であった。調査対象となった科目の総履修者数は11,010名で、そのうちの66.62%にあたる7,335名から回答があった。この回答率は全学平均(63.93%)より高かった。昨年度の回答率(71.18%)よりは下がったものの、文学部としては継続的に高い回答率を確保しており、学生の授業内容に対する関心が維持されていることを意味するものと考えられる。

学年別の回答者数を見ると、1年生3,189名、2年生2,105名、3年生1,337名、4年生591名、その他が113名となっている。導入教育を中心に学科・専修ごとに科目を指定し、それぞれの動向を把握するというねらいに対応した分布になった。

I 「授業への取り組み方について」

文学部において、I5「シラバスの有効性」は昨年度の3.75から3.71へと減少したものの、それ以外の項目はすべて上昇した。I1「出席率」は昨年度の91.92%から92.17%へ、I2「授業参加の積極性」は3.98から4.03へ、I3「十分な準備」は3.46から3.51へ、I4「発展的な勉強」は3.40から3.43へ、I6「授業時以外の学習時間」は特に大きく、0.98から1.06へと上昇した。昨年度の結果を受けて、学部全体で授業改善に取り組んだ成果が出たものと思われ、学生がより一層の興味をもって授業内外の学習に取り組んだことが窺われる。

II 「授業の進め方」

II7「板書のしかた」を除く全項目で4点台となっており、昨年度同様全体的に高い評価が与えられている。II5「授業の静粛性」については、昨年度と同様、教室規模によって大きな差があらわれている。50名以下の教室では4.45であるのに対し、151名以上では3.65である。大規模教室での静粛性の確保は、引き続き大きな課題として残る。II7「板書のしかた」は昨年度が3.81、本年度は3.80でほぼ変わらない。また、II8「映像視覚教材」とII9「教員の授業準備の周到さ」は昨年度とほぼ同様に、4.20と4.35という高い数値を保っている。II9は101～150名規模の教室でも4.47という高い数値を出しており、静粛性の問題はあるにせよ、教員側は大人数講義において、より一層綿密な準備を行って授業に臨んでいることがわかる。

Ⅲ「授業から得たもの」

Ⅲ1「自分にとっての新しい考え方」とⅢ2「基本的な専門知識」はともに4点台となっており、相応の効果があがっているように思われる。Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」は3.72で、昨年度よりは上昇しているが十分とはいえない。教室規模に応じて、大教室ほど大きく落ちこんでいく。特に講義科目において、学生の主体的な知的努力を促す工夫を検討する必要があるだろう。

Ⅳ「総合的評価」

ほぼ全ての項目で4点台となっており、全体としてはある程度の水準が保たれたといえよう。いずれの項目も学年が上がるごとに評価が上昇し、理解度や関心における学生の側の成長が窺える。また、教室規模が大きくなると評価が下降する傾向にある。151名以上の大教室授業において、Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」、Ⅳ4「満足度」が3点台と低くなっているのは、教員側のねらいと学生側の履修の動機の乖離等に理由を求めることができ、引き続き注視する必要があるだろう。

Ⅴ「学部等による設問」

V1「教室の大きさ」、V2「受講者数」それぞれ4.30、4.20という高い平均値が出ており、教室規模・受講者数とも適切だったという回答が多く寄せられた。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が学生の評価と向き合い、その内容を正面から受け止めて、今後の改善策を探ることにつなげようとする姿勢を表明している。特に、評価が低い項目についてはそうした傾向が強い。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

教員の姿勢に対する好感や、和気藹々とした教室の雰囲気や好意的にとらえるものも多かった一方で、課題の多さや厳しさについての指摘もあった。また、プリントの配布方法や学生と近くで接するTAやSAのあり方等、教員にとって参考になる、具体的かつ技術的な意見も少なくなかった。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が、寄せられた学生の声を丁寧に聞き取り、今後の授業に活かそうとする姿勢を見せていることは確かである。具体的な希望が書きやすい項目ゆえ、各教員にはその内容が伝わったものと見え、こうした傾向が3-1に比べても一層強くなっている。

演習・講義といった授業種別を問わず、学生からのコメントに励まされたという旨の記述が少なからず見られ、大規模な教室での授業担当者でも、学生との意見交換を求める姿勢が保持されていることが読み取れる。これは、リアクションペーパーの活用とそれによる効果を指摘する所見が少なからず見られることとも対応しよう。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、アンケートの結果を受けて、授業改善を目指した対応を行おうとしている。改善すべき点は授業ごとに異なるが、配布資料や提示資料の分量や方法、オンライン授業支援システムの Blackboard の活用、授業時以外の課題のありかた、私語への対策等が挙げられる。学生が満足できる授業を目指すのはもちろんのことだが、一方で、大学の授業の「面白さ」とはどういうことなのかを見つめ直そうとする所見や、学生の知的成長のために一定程度の課題や厳しさが不可避であるといった所見もあった点を書き添えておきたい。

4. 今後の改善に向けて

昨年度から継続して、授業時以外における学生の準備等をどのように定着させるか、また、それを踏まえて授業時に学生と教員、あるいは学生同士の双方向的なやりとりを確立していくかが課題として提示されてきた。少しずつではあるが改善の兆しが見えてきたように思う。引き続き努力を続けるとともに、とりわけ導入教育を効果的に運営し、早期から学生の知的好奇心の涵養や主体的参加を促すよう努めることが必要であると考えられる。

また、文学部の特性として、たとえば映像やパワーポイントだけでは構成できない内容の授業も少なからず存在する。そうした文字資料の精読に類する授業において、学生をいかに集中させ、より高度な思考へと誘うかについても、引き続き教員の側の丁寧かつ根気強い努力が必要であると考えられる。

大規模教室での授業環境の改善は、継続して取り組むべき課題として残されたままである。現場の教員の工夫とともに、各学科・専修による、配置時間帯の工夫や他学部履修の可否の検討等の教務的対応も不可欠であろう。とりわけ 2019 年度の 100 分授業化に伴う状況変化に的確に対応することが急務である。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2017年度の選定方針は概ね以下の通りである。

- ・「講義科目1 教員1 科目」の調査は実施しない
- ・アンケートは原則春学期に実施するが、通年科目については秋学期に実施する
- ・共通シラバスを用い、授業の目的および内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目および積み上げ方式の1年次科目についてアンケートを実施する（とりわけその基幹科目については、グループ集計を行う）

アンケートのねらいは、学生側からの授業評価を通じて、今後の授業改善のための課題を各々の教員が認識することにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2017年度のアンケート実施科目数は69科目（実施予定科目70科目）、回答者は延べ3,532名となった。履修者数と比した回答率は79.09%と全学平均（63.93%）を大幅に上回り、異文化コミュニケーション学部、学校・社会教育講座に次いで高いものになった。回答率が高かった要因として、実施対象科目の中心が1年次の必修あるいは自動登録科目であり（述べ回答者の9割が1年次生）、学生の講義への出席率が相対的に高かったことが考えられる。

項目別平均値をみると、ほとんどの項目で3点台後半から4点台の高い数値がでている。とはいえ、「Ⅰ この授業へのあなたの取り組み方について…」のなかの「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」が3点台前半であったことが注目される。上記の通り、今回アンケートを行った科目が1年次向けの導入期に該当する科目であったことを考えると、授業内容を理解することに力を注いだか、あるいは当該科目の内容を発展的な勉強へとつなげられるような学問的関心が喚起されていない可能性を示唆していると思われるからである。実際、「Ⅲ この授業から得ることができたもの」の各項目が3点台後半にとどまっていることを考えると、後者である可能性が高い。このことは学部全体として学生、とりわけ初年次学生に対して現代経済への関心を高める試みが必要であることを示唆しているといえよう。学年別平均値でも同様の傾向を見ることができる。

また、授業規模別平均値に関しては、規模が小さいほど平均値が高い傾向がみられる。これは今回のアンケートで100人を超える授業規模の科目が12と少なく、全体の8割程度が「基礎ゼミナール1」のような演習科目および「簿記2」「情報処理入門1」のような実習系科目で、教員の目の届く指導が行われたことを反映しているものと思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経済学1、経済学2、簿記2、情報処理入門1、統計学1、基礎ゼミナール1を抽出してグループ化し、集計を行った。基礎ゼミナールについては、担当者（専任・助教・兼任）別にグループ化したため、総計8つのグループ集計を行った。

3-2 グループ集計の結果の概要

1) 必修科目

必修科目のグループには、「経済学 1」、「経済学 2」および「簿記 2」が該当する。

「経済学 1」および「経済学 2」はそれぞれ共通シラバスの下、複数の専任教員のみによって講義が実施されている。これらの結果をみると、両科目とも担当者および設問項目に大きなばらつきがなく、教員が教授すべき共通の課題をもって講義が行われたことが、学生からの同様の評価につながったと考えられる。一方、「簿記 2」は、その科目特性もあろうが、担当者ごとに大きなバラつきが生じている。兼任講師への依存度が高く、情報の共有が難しいグループではあるが、個別の担当教員との連絡および兼任講師懇談会などの機会に調査が必要であるように思われる。

2) 1年次自動登録科目

1年次自動登録科目に該当するグループには、「基礎ゼミナール 1」や「情報処理入門 1」、「統計学 1」が該当する。

「基礎ゼミナール 1」および「情報処理入門 1」については、全般的に評価も高く、クラスによる極端な差異もあまりなかった。とくに前者については、「自分で調べ、考える姿勢」が身についたとの回答割合が高く、教育目的が果たされているように思われる。理由のひとつは、共通テキストの利用や定期的な担当者会議の開催を通じて授業情報および授業運営の共有化を行っていることにあると思われる。とはいえ、クラスによっては「静粛性」に関してバラつきが見られることから、担当者会議などの場を通じて静粛を保つ環境づくりなどについて議論するなど、授業水準を揃えていくような工夫を続けたい。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

アンケートを実施した 69 科目について、すべての所見票が提出された。

所見の記述量は教員によって差異があるものの、内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）およびレジュメなどの配布資料等について改善を求める学生からの指摘に対し、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢が示されている。静粛性について改善の余地があるとの所見も見られた。

とくに 1 年次向け科目が多かった今回の所見では、先の「集計データにみられる結果のまとめ」でも問題視された、経済学および現代への興味関心を引き出すことに苦慮されているコメントが見られた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

記述は多様性に富むが、大まかに集約すれば、例年同様、教員の説明（声の大きさ・スピード、例え話など）や配布・掲示教材がよい、という意見が多くみられる。また、理解を深めるための小テストや課題などが有効であったとの記述もあった。他方、声が聞こえにくい、私語がうるさいというコメントがあったほか、それに対して教員の行う注意が細かく、厳しすぎるとの記述もあった。

2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的な評価に対しては、それをさらに改良していくことが記されている。否定的ないし改善を求める学生からの指摘については、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢を示している。そのなかには、SA や TA と協力していくつかの課題解決にあたったとの所見も見られる。また今後の改善のための努力には、私語への対策や PC 操作に慣熟すること、リアクションペーパーを使った理解度の確認および授業後に課題を示すことで学生の予習・復習のきっかけづくりを行うことなどが挙げられている。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生の理解を助け、知的欲求を満たすために各教員が細やかな継続的取り組みを実践していることが読み取れた。とはいえ、レポートや毎回出される課題の整理・採点、アクティブ・ラーニングのための準備などが負担になっていることも否めない。細やかな対応を要する初年次教育だけに、学生の希望の何に、どこまで応じるかという問題があるため、教員同士の情報の共有は不可欠であるとともに、学部として初年次教育の在り方を引き続き検討・改善していくことが求められる。

5. 今後の改善に向けて

アンケート対象科目の多くが 1 年次生向けの基幹科目という特性もあって、全体を通じた授業への出席率は 9 割を超え、積極的・意欲的な学生の授業参加の姿を確認できた。それにもかかわらず、授業時以外の学生の主体的な学びの時間増加につなげること、授業を契機として発展的な学びへの関心を引き出すことに関しては課題が残されていることが明らかになった。

例年指摘される上記の課題に対し、「良い授業の経験を共有する」、「学生をマスとして扱うのではなく、適切なフィードバックの実施を勧める」などの改善策を提起してきたが、いずれも道半ばで、各教員によっても試行錯誤が続けられている。一例としては、ゲストスピーカー制度の利用で授業の雰囲気を変えるという試みも一定程度有効であったとの声も寄せられている。

今回アンケートを実施した科目の授業は、アカデミック・スキルを修得させる内容が多くの割合を占めてしまう傾向にある。教員はその授業での学びが歴史的、理論的、実践的にどのような意味をもっているか、積極的にその意義を伝えられる授業内容の再検討が必要であろう。また、そうした教授の結果、学生が感じ、考えたことを学生同士が披露し、議論できるような雰囲気・環境づくりの努力も続ける必要がある。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2017年度は、「学部等の必要性に応じた選定」という全学的方針に基づき科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年度なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2017年度は、数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）で新規に設計した必修科目・選択必修科目を、物理学科では原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目を、化学科では原則として必修講義科目ならびに選択講義科目（複数教員担当科目を除く）を、生命理学科では原則としてすべての講義科目（複数教員担当科目を除く）から教員1名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うため、例年通り非実施であった。また、理学部独自の設問についても、前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は64.38%であり、全学平均（63.93%）と同等であった。また、昨年度の理学部の回答率（65.04%）とも同等であった。学年ごとの延べ回答者数は1年生1,447名、2年生1,553名、3年生999名、4年生258名であり、昨年度に比べると、1,2年生の回答者数が増加し、3,4年生の回答者数が減少した。

各アンケート項目における理学部の平均値を昨年度と比較すると、全27項目中、「(I1) 授業全体を通じての出席率」は微減となっているものの、それ以外の26項目のポイントは上昇した。授業の出席率は、ここ数年、微減の傾向が続いていることに注意したい。「(I6) 授業時以外に学習した時間」の平均値は1.34であり、昨年度の平均値（1.31）より微増となっているが、「3時間以上」と回答した学生が約10%であるのに対して「1時間未満・0時間」と答えた学生が約45%を占めており、自宅学習に十分な時間をかける学生は多くない。ポイントの増分が比較的大きかった項目としては、「(II6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」（昨年度4.00→本年度4.07）、「(II7) 板書のしかたが適切だった」（3.83→3.91）、「(II8) 映像視覚教材の使用が効果的だった」（4.02→4.10）、「(IV1) わかりやすい授業だった」（3.87→3.94）などがあり、教員が具体的な改善策を実施した結果が反映されていると考えられる。

学年間で比較すると、多くの項目において、1年生よりも2,3,4年生のポイントが高い傾向がみられた。これは、1年生は高等学校での学びから大学での学びへの接続に戸惑うことも多いが、学年が上がるにつれて徐々に学習の仕方を体得することを反映しているのかもしれない。その一方で、「(I1) 授業全体を通じての出席率」については、4年生のポイントが最も低かった。これは、4年生は就職活動などのために授業に出席できないことが多いためと考えられる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

理学部では、生命理学科の科目についてグループ集計を行った。アンケート対象の科目について、学年・必修科目・分野の観点から多角的にグループ分けを行い、8グループについて集計した。すなわち、1年生科目（グループ1）、2年生科目（グループ2）、3年生科

目（グループ 3）、必修科目（グループ 4）、分子生物学分野科目（グループ 5）、生物化学分野科目（グループ 6）、分子細胞生物学分野科目（グループ 7）、その他科目（グループ 8）として分類した。

3-2 グループ集計の結果の概要

学年間（グループ 1～3）の比較では、多くの項目において、高学年になるほど評価が高くなる傾向がみられた。一方、「(I1) 授業全体を通じての出席率」については、高学年になるほどポイントが低くなった。これらのことについては、2で述べた理学部全体の傾向とも大きくは矛盾しない。

分野別（グループ 5～8）の比較では、「(I1) 授業全体を通じての出席率」において、グループ 5（分子生物学）および 8（その他）の方がグループ 6（生物化学）および 7（分子細胞生物学）よりもポイントが高かった。「(I6) 授業時以外に学習した時間」においては、グループ 6（生物化学）および 7（分子細胞生物学）の方がグループ 5（分子生物学）および 8（その他）よりもポイントが高かった。項目ⅡおよびⅣにおいては、グループ 5（分子生物学）の方が他の 3 グループよりも高評価である傾向がみられた。項目Ⅲにおいては、グループ 5（分子生物学）および 7（分子細胞生物学）の方がグループ 6（生物化学）および 8（その他）よりも高評価である傾向がみられた。

必修科目を集めたグループ 4 に関しては、学年別（グループ 1～3）もしくは分野別（グループ 5～8）で分類したグループと比べて、多くの項目において概ね平均的なポイントとなっており、特に顕著な特徴は見受けられなかった。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

高い評価もしくは概ね高い評価を受けているという所見が多くみられた。授業時以外の学習時間の不十分さ、遅刻、授業中のいわゆる内職などに懸念を示す所見もあった。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「肯定的評価として多い意見の集約」

授業が分かりやすい、解説が丁寧であるなどの評価があった。資料の配付、資料のスクリーンへの投影、オンライン授業支援システム Blackboard への資料のアップロードなど、授業における工夫に関して肯定的な意見を得た科目が多くみられた。演習問題や小テストなどの実施およびそれらに関する解説、前回の内容を復習する時間の設定、TA による指導補助、ゲストスピーカーによる授業などに関して肯定的な意見を得た科目もあった。

「否定的評価として多い意見の集約」

否定的な意見としては、授業のスピード・話すスピード・板書のスピードが速い、授業内容や資料の量が多いなどがあった。資料の誤植、板書の間違い、マイクや照明などの機器・設備の不備に関する指摘もあった。

2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

自らが行った具体的な工夫や改善策に関して高評価を得ていることを実感している教員が多くみられた。また、学生から指摘された問題点について改善を試みる意思や具体的な改善策を示す所見が多くみられた。一方で、学生の個人差に起因すると考えられるが、授業内容が易しい・難しい、板書が遅い・速いといった相反する意見を受けて、それらへ対処に戸惑うという所見もみられた。授業時以外の学習時間や質問の少なさなど、学習に対する学生の積極性の低さに懸念を示す所見もあった。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

資料や板書の改善、話し方の改善、映像視覚教材の効果的使用、学生のレベルに応じた授業展開などが挙げられた。また、学生の授業時間外学習や授業への積極的参加を促すために、宿題を課す、学生による口頭発表を取り入れる、学生の知的好奇心を刺激する授業を目指すなどの改善策・方針も挙げられた。

5. 今後の改善に向けて

昨年度アンケートでの評価や指摘を受けて、教員が 2017 年度の授業で改善を試み、またそれが有効に作用しているケースが多いことが、2017 年度のアンケートにおける全体的な評価の向上に繋がっていると考えられる。これは授業実施に対する教員の真摯な態度と努力の表れであり、各教員が今後もこの姿勢を継続することが肝要である。

その一方で、学習に対する学生の積極性の低さ（授業時以外の学習時間や質問の少なさなど）に懸念を示す教員も多い。宿題を課すといった物理的な対策にも一定の有効性はあるだろうが、自然科学に対する学生の関心や知的好奇心を向上させるような授業の内容や方法の工夫が重要である。これについては、各教員の努力とともに教員-教員間や学生-教員間の情報交換などを通じて今後も模索していく必要がある。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2017年度は、前年度を踏襲した従来通りの選定を行った。

①必修科目はすべて実施する

②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目はすべて実施するという変更を行った。また、②は2007年度以降の選定方針を踏襲しており、2017年度も講義科目について最低「1教員1科目」を選定し、ほぼすべてこの方針で実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

回答者数が少ない授業規模ほど総じて評価が高くなるのは、社会学部に限らず、例年の傾向である。しかしながら、50名以下を「S」、51~100名を「M」、101~150名を「L」、151名以上を「LL」として、社会学部117科目の結果を見ると、評価がS>M>L>LLという単純な線形的関係でないものが多い。ただしSとLLを比べると、ある程度の差はあるようだ。Sは、「II1聞きやすい話し方だった」、「II5静粛性」、「II6教科書・レジュメ・参考文献が効果的」、「II7板書の適切さ」の各項目で評価が高い。平均が4点台の項目は、IIの9項目中S、Mとも8項目、IIIは4項目中S、Mとも3項目、IVの4項目中ではSは全項目、Mは3項目である。100名以下のクラスは、相対的に高い評価を得ている。

また、「I1出席率」は、Sが90、Mが89、Lが92、LLが93と、規模が大きいLLで高く（有意差があるかは不明だが）、「I2授業への積極的参加」、「I3履修にあたっての十分な準備」も、規模による違いは、統計的な誤差範囲を考えるとほとんどない。

ただしII、III、IVの各項目では、LやLLの評価が低くなる傾向は否めない。IIIの各項目はどれも、LLは3点台（3.93、3.86、3.52、3.85）であった。IV4「この授業を受けて満足した」はL3.94、LL3.92でありS4.18と比べて低い。つまり、社会学部ではLやLL規模での授業における工夫が課題といえよう。

2-2 学年別

昨年度までと同様、「I1出席率」は学年が進むにつれて低下している（1年94、2年93、3年90、4年86）。「I2授業への積極的参加」（3.87~3.97）、「I3履修にあたっての十分な準備」（3.34~3.46）は、学年による差が大きい。しかし、上記項目以外のいずれの項目も、学年が進むにつれて数字が高くなる傾向が見られる。回答データを、社会学部学生で学年を回答した9,014名に絞って分析したところ、例えば「IV4授業満足度」は1年か

ら4年まで3.75、4.08、4.04、4.24であり、4年ほど満足度が高い。これは学年により、履修する授業の規模が異なることが一因としてあげられる。学年が上がるにしたがって、授業規模が小さくなる傾向があり、前節で指摘したように、LL規模はどうしても評価が低い。学年による違いは、学習が進むことで大学の授業に対する適応力が増すと同時に、履修授業規模の違いも働いていると推測される。また、基礎的な総論よりも、高学年向けの各論や発展的科目の方が、おそらく学生にとっては興味深いと感じることも一因であろう。学年を回答している9,014名に関して、「IV4 授業満足度」を被説明変数として、説明変数に学生の所属学科と学年を用い二元配置分散分析を行ったところ、学科の直接効果は有意でなく、学年と、交互作用項が、満足度に対して有意な効果を持っていた。IV1 からIV4 に関して、どれも同様の結果だった。

2-3 学科別

科目開設学科による分類では、全体としてメディア社会学科と現代文化学科の数字が高く、社会学科、共通科目が相対的に低めの数字となっている。例えば「IV4 授業満足度」は、メディア社会学科 4.16、現代文化学科 4.13、社会学科 3.96、共通科目 3.90 であり、II、III、IVの設問で4.00を超えているのは、メディア社会学科が13、現代文化学科が15、社会学科7、共通科目は3であった。

ただしこれは学生の所属学科ではなく、科目を開設した学科（科目コード DA,DD,DE,DK）による分類である。以下の表のように、共通科目は基礎的な科目が多いため1年生が多く、必修科目等では、学生は自分の好みや興味関心に関わらず出席しなくてはならないため、満足度は低くなりがちであり、結果の解釈に注意が必要である。また社会学科の科目は、2年生が他より多めであり基礎科目としての性質が強いようだ。

表1. 社会学部科目開設学科と回答者学年のクロス集計

	1年	2年	3年	4年	合計	100%の人数
社会学科	0%	48%	38%	14%	100%	(1029)
現代文化	0%	41%	42%	17%	100%	(1578)
メディア社会	0%	43%	42%	15%	100%	(1485)
共通科目	54%	25%	15%	5%	100%	(5711)
合計	32%	33%	26%	9%	100%	(9803)

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年と同様、授業の私語や静粛性に関する記述が多く見られた。大人数講義で苦慮する見解もあった。講義であっても、グループワークなど学生への主体的参加を促す試み、リアクションペーパーやコメントなどフィードバック機会の確保、映像資料、ゲストスピーカー、授業支援システム Blackboard の活用など、授業の工夫についての記述も多い。授業時間外での学習機会、発展的学習について、促す必要性の認識と具体的な実施の難しさも記述が多かった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

所見票では、授業に対する積極的評価（配布資料、授業の仕方、視聴覚資料の活用などの工夫）、授業環境（静粛性、温度、調光など）について教員の対応を評価する見解と不十分であることの指摘の両面、授業の進め方の速さ（速すぎる場合の指摘）、展開される概念、議論のレベル（難しすぎる場合）、話し方（声の大きさ、スピード）についての要望などが多く見られた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的コメント、改善を求めるコメント、両者とも、積極的に受け止め、よりよくするために役立つ意向が強く表明されていた。授業の進め方や難易度については、多様な学生たちに一律に対応できないことへの難しさも言及されている。授業環境についても、あまりに厳しすぎると授業の雰囲気全体が固くなりすぎ、緩めると不満を感じる学生も多くなるため、調整が難しいことを認識した上で、積極的に取り組む姿勢が見られた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

3-1にあるような授業の工夫、配布資料の改善、授業内容の発展・刷新、発展的学習、授業外学習を促す工夫への取り組みの必要性、3-2にある授業環境改善への要望の対応などが多く見られた。

4. 今後の改善に向けて

改善すべき点は、例年のように、静粛かつ積極性のある授業環境を実現するために、大規模授業の減少に努めることである。2014年度から一部の大規模授業で他学部履修者の人数制限を行い、一定の効果があったと考えられるが、制限していない科目では依然として履修者が非常に多い科目が存在している。このため他学部履修者の人数制限を引き続き検討するとともに、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっているが、今後も継続的に授業運営および内容の改善に取り組んでいく。教授会などにおいても、初年次向けの教育内容について改善の可能性などについて検討している。

分析結果に関しては、全般的に、履修者数に対して回答者数が少ない科目が多く、つまり、実際の出席者数が少ない科目がある。その事が必ずしも悪いとはいえないが、その科目の内容を好んだ学生のみが、最終的に教室に残って回答している傾向が強くなるので、評価は高くなりがちだろう。この比率に関して考慮した上での分析も必要である。また必修科目は、内容が自分の興味・関心とは関係なく出席せざるをえない学生が多い（そのため満足度が低い）ことが想定される。上記のように1年生の満足度は低めであり、結果の解釈には注意が必要である。科目の分類を考慮した分析も今後の課題であろう。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。2017年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを実施する年度に該当するため、教員の希望を調査した上で、合計8科目につき授業評価アンケートを行った。なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられるためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照し、回答率、設問項目別平均値、授業規模別平均値、学年別平均値、設問項目間の相関の結果についてまとめる。

回答率は、40.30%であり、全学の回答率 63.93%と比較して低い。アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、設問項目Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」(4.21)が最も高い値を示している点を特筆すべきであろう。教授会や兼任講師との打ち合わせ会を通じて、授業中の私語防止のためのベストプラクティスを共有するといった取り組みを行ってきたことが反映されたものと考えられる。また、前年度と同様、設問項目Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」(4.16)が、高い値を示している。総合的にみても、設問項目Ⅳ1「わかりやすい授業だった」(3.91)、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」(3.92)およびⅣ4「この授業を受けて満足した」(3.89)の値が高く、授業における教員の努力や工夫が高く評価されている。

他方、例年と同様、設問項目Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.04)およびⅠ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(2.95)の値が低い。また、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(0.98)も、十分な時間とはいえない。講義科目において、学生に主体的な学習を促すことの難しさが表れたものと考えられる。

授業規模別平均値については、授業規模100名以下の講義とそれ以上の規模の講義との間に顕著な差がある。特に、設問項目Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」およびⅡ7「板書のしかたが適切だった」における差異には、教室の大きさが影響している可能性があり、授業規模や授業環境の改善が課題である。

学年別平均値については、対象科目に1年次生が履修できる科目がないため、2年次以上の学年別平均値が算出されている。2年次生の出席率が比較的高いものに対して、3、4年次生の出席率が下がるのは、就職活動が原因であると考えられる。また、各設問項目についても、3、4年次生と比較すると2年次生が高い値を示している。この点については、2年次生全体の授業に対する積極性や満足度が高いのか、アンケート対象となった各科目の配当年次が関係しているのか、分析が難しい。

設問項目間の相関においては、総合評価項目であるIV1「わかりやすい授業だった」およびIV2「授業全体の目標が明確だった」と設問項目II3「各回の授業のねらいは明確だった」およびII4「各回の授業内容は明確だった」とが強い相関関係を示しており、各回の明確さが授業全体の分かりやすさ、明確さにつながっていることが分かる。また、IV4「この授業を受けて満足した」の設問項目は、授業の進め方の設問項目（II）および授業から得ることができたものの設問項目（III）と関連するものの、授業への取り組み方（I）の内、出席率（I1）、履修にあたっての準備（I3）および授業時以外の学習時間（I6）との関連が弱い。学生の受動的な学習態度の表れと分析することができるかもしれない。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」まとめ

担当教員の所見では、各教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的に評価の低い項目があった場合については、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。具体的には、板書や話し方について、学生の評価を受け止め、改善の方向を示すものがあった。また、本学で初めて授業を開講する教員が、比較的高い評価に安心した旨の記載があった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」まとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

コメントペーパー、リアクションペーパーといった学生の意見を汲み取る方策について、肯定的な意見が目立った。

レジュメ（配布資料）については、分かりやすいという肯定的意見が多い一方、同じ授業についても、分量が多いといった否定的意見もあり、当然のことではあるが、学生によりその評価が分かれる。

AV 機器や冷暖房の不備を指摘する意見が散見され、大教室講義が抱える設備面での課題が明らかになっている。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

各教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。具体的には、コメントペーパーのような学生の意見を汲み取る方策やレジュメに対する肯定的意見につき、今後も同様の取り組みを継続する旨述べる一方、板書や話し方に対する意見には改善を約束している。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

各教員がアンケートの結果を踏まえて授業改善に向けた検討を行っている。内容は各教員が認識した課題に応じて様々であるが、①レジュメの内容・形式の改善、②板書の改善、③コメントペーパーや質疑応答を通じた学生による授業参加の促進、④視覚教材の活用等が挙げられる。

他方、複数の教員が、授業の前提知識や事前学習について履修者間に差があり、全てのレベルの学生を満足させることは困難である旨述べている点を指摘しておきたい。

4. 今後の改善に向けて

2017年度の授業評価アンケートの結果は、例年と同様の傾向を示しており、授業の進め方（Ⅱ）や授業から得たもの（Ⅲ）、そして、授業全体（Ⅳ）について、学生が高く評価していることが分かる。一方、このような高い評価と比較すると、学生の授業以外での学習への取り組みが十分ではない点が残された課題である。

前年度、当欄において、学生の主体的・積極的な学習を動機づけられる授業を実現すべく、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続する方向性が示された。これにもとづき、2017年度には、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を活用し、教員間での情報共有が行われた。各授業における改善は、未だ数値には表れていないものの、今後も、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を通じて、学生に主体的・積極的な学習を促す工夫を教員間で共有し、各授業の改善を進める方針である。なお、2017年度に授業の静肅性が高く評価された点に鑑み、今後も、授業中の私語防止に関するベストプラクティスの収集および情報共有も継続する。

また、2年次生以上の学生が履修する科目のみが授業評価アンケートの対象となった2017年度は、授業の前提知識や事前学習について履修者間に差異があることが問題視された。本総評を教授会において共有することで、科目の履修にあたって必要とされる前提知識（履修しておくべき他の科目等）をシラバスに記載する等の試みを通じて、学生に科目履修の目安を示すことができるよう努めたい。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、2～4年次演習およびビジネス・リーダーシップ・プログラム（以下、BLP）・バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラム（以下、BBL）関連科目を除いて、原則として全科目を対象に、春学期55科目、秋学期46科目の合計101科目で授業評価アンケートを実施した。全科目を指定している理由は、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお、BLPおよびBBL関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は91.59、「この授業に積極的に参加した（I2）」は3.93と、それぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率（回答者数/履修者数）が54.22%と低いことを考慮すれば、積極的に参加する学生とそうでない学生の取り組み方に差がある可能性が懸念される。

一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」（3.55）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」（3.48）、「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.60）、「授業時以外に学習した時間（I6）」（1.17）については、昨年度から多少の改善は見られるものの、今後もさらに数字を高めていく余地があると思われる。特に「授業時以外に学習した時間（I6）」について、5割以上の学生が1時間未満と答えている。つまり、学生は授業に積極的に参加しているものの、予習・復習などへの意識が低いことがわかる。予習・復習に繋がる課題の工夫などが継続して必要であろう。

授業の進め方については、「板書のしかたが適切だった（II7）」の平均3.75が最低であり、他のすべての項目は3.9以上という結果であった。板書については、「該当しない」という回答が4割程度おり、パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトウェアが使用されていることが要因だと考えられる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」については、4.22という評価を得ている。それでも学部として現状に満足せず、今後も授業の進め方の改善に努めていく必要がある。

授業から得られたものを示す4項目については、いずれも3.71以上と昨年度から0.08ポイントの底上げが見られた。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」が最も高く3.98（昨年度は3.96）で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く3.71（昨年度は3.63）であった。「自分で調べ、考える姿勢」については、数値自体は低くはないが、学年別に見ると、学年が上がるにつれその数値も上がっている（1年3.57、2年3.62、3年3.82、4年3.93）、低学年ではまだ自学自習への準備が十分ではないと推測できる。また、授業規模で見ると（50名以下3.99、51名～100名3.66、101～150名3.79、151名以上3.58）、50名以下の比較的規模が小さい授業で、より自分で調べ考える姿勢が見られる。

この分析から、低学年への自学自習を促す工夫や、規模が大きい授業における対策が必要であると示唆される。

総合的評価の4項目では、最も低い評価が「学問的興味をかきたてられた(IV3)」の3.89、最も高い評価が「授業全体の目標が明確だった(IV2)」の4.01であり、両方とも昨年度から若干の改善が見られた。これらの総合的評価項目を学年別・規模別に見ると、学年が低いほど、また回答者の規模が大きくなるほど数値が下がる傾向がある。これに関して、低学年の学生や規模の大きな授業に対する何らかの対応が必要ではないかと考えられる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、経営学部では必修科目や自動登録科目である(BLP、BBLを除いた)「経営学入門」、「経済学入門」、「会計学入門」、「ビジネス概論A」、「ビジネス概論B」のクラスでグループ集計を行った。これらのうち4科目は複数教員による授業であり、結果・ノウハウを共有することで、より良い授業にしていく狙いがある。「経済学入門」は同一教員による複数クラスの担当であるが、同様にグループ集計を行った。

3-2 グループ集計の結果の概要

「経営学入門」は、4名の教員が1クラスずつ担当した。昨年度と同様に、複数の項目で一つのクラスが突出して評価が高かった。例えば、「聞きやすい話し方だった(II1)」、「各回の授業内容の量が適切だった(II2)」、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった(II6)」、「わかりやすい授業だった(IV1)」などで唯一平均4.00を超えていた。他の項目では大きな差は見られなかったが、担当教員間で望ましい取り組みを共有することも有効であると考えられる。

「会計学入門」は、3名の教員が合計5クラスを担当した。基本的にはクラス間で際立った差は見られなかった。しかし、いくつかの項目で評価が高く、授業時以外の学習を顕著に促しているクラスが存在した。「経営学入門」と同様に、担当教員間で望ましい取り組みを共有することが有効であると考えられる。

「ビジネス概論A」と「ビジネス概論B」では、クラス間で大きな差は見られなかった。全体的に高い評価を得られているが、教員同士で結果や要因を共有することで、より良い学習に繋がられるよう期待したい。

同一教員による複数クラス担当の「経済学入門」については、クラス間で大きな差は見られなかった。同一内容を講義していると予想されるため、この結果は想定した通りである。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」では、評価が比較的高かった項目に対する教員自身の分析が多く見られた。具体的には、リアクションペーパーの活用やレジュメやスライドの有効性などである。対照的に、評価が低い項目については、その原因(例えば授業の静肅性が保てなかったなど)や対応策(授業コンテンツの改良など)に関する所見が見られた。また、科目によって所見における記述の詳しさに差が見られた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」は、教員の丁寧な説明、発言の加点（発言を促す仕組み）、授業の内容と連動した練習問題の提供、オンライン授業支援システム Blackboard の有効活用、スライドの見せ方、様々な企業ケースを用いていること、フィードバックの活用、映像資料の活用、グループワークの活用、ゲストスピーカーの起用などに関するものであった。また、授業環境に関して、教室内の静粛性やディスカッションに適したクラス規模に対する肯定的意見もあった。

学生の「否定的評価として多い意見」の中では、教室での私語の多さや騒がしさに対する不満が目立つ。私語を教員が黙って見過ごしていることに対する反感も見られた。加えて、教員が話すスピードの速さや適切な声の大きさに対する要望も多く見られた。スライドやレジュメに関しては、見づらさや不適切な分量を指摘する声が多かった。また、スライドの切り替えスピードが速くてノートが取りづらい、スライドを講義前後に Blackboard など提供して欲しいなどの意見があった。授業内容に関しては、量が多い、難しすぎる、進行スピードが速いなどの意見も見られた。授業環境に関する意見として、履修者数の多さや学生が自由に出入りする環境とその対策などが挙げられた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の記述が少ない中、肯定的評価の確認や否定的評価に対する改善への言及が見られた。肯定的な評価に対しては、わかりやすい授業であったことや授業の雰囲気良かった、授業で用いた資料の効果などの確認が示された。また、「興味のある内容だった」などの学生の意見に対して、授業の継続的な向上を目指す意見も見られた。否定的評価に対しては、後ろの席における静粛性が保たれなかったことやパワーポイントの進むペースが速いことに対して配慮する意見が見られた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「改善に向けた今後の方針」については、例えば授業進行（パワーポイントのスライド操作）のスピードが速いことや板書の見づらさに対して、改善策が提示されていた。教室の静粛性についても多く言及がなされており、今後は厳しく取り締まるという記述が見られた。また、学生のやる気を促すために、インタラクティブなグループワークを導入する、ゲストスピーカーを招いてメリハリをつけるといった方策が示されていた。

5. 今後の改善に向けて

2017年度の総合的評価を見ると比較的高い評価を得ており、昨年度の値から改善している項目も多かったが、それで満足するわけにはいかない。昨年度と同様であるが、学生側の授業に対する取り組みを示す6項目のうち、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」はまだ相対的に低く、授業時以外での学習時間も決して十分とはいえない。また授業から得られたものを示す4項目のうち「自分で調べ、考える姿勢（III3）」も改善の余地がある。この値は、

授業には参加するが、それ以外の時間は学問から離れてしまっていることを示唆している。この点については、科目ごとに講義形式や履修者数が異なるため一様に論じることは難しいが、課題や宿題を与える、事前にテキストを読ませるなど講義への準備を促す工夫が必要であろう。

また、学生自身から寄せられたコメント（記述による評価部分）にもしっかり耳を傾け、講義を継続的に改善していく必要がある。パワーポイントの活用やレジュメやスライドを印刷した資料の配布は学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進度が求められる。映像資料の利用は、学生の学習にとって効果的であると考えられるが、理解した気になりやすいので、定着させるためには十分な理論的説明とのバランスをとることに留意する必要がある。総合的に見て高水準の教育ができている反面、講義の静粛性や規模への配慮など、さらなる改善が必要な面も多く、教員それぞれの取り組みにより、次年度は学生からの評価がさらに向上することを期待したい。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

異文化コミュニケーション学部では、学部が調査を必要と考える必修科目（言語・コミュニケーション研究入門、グローバル・スタディーズ研究入門、Cultural Exchange）、1年次自動登録選択科目（College Life Planning）、および 2017 年度新規開講科目 International Organization、Social Movement & Social Change）についてアンケート調査を実施した。

そのねらいは、学生に履修を課している科目の現状を把握するとともに、新たに導入された英語によるコンテンツ科目について検証することにある。同一科目を複数の教員が担当する必修科目についてはグループ集計を実施した（ただし、Dual Language Pathway 対象の授業は除いた）。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は、計 16 科目（春学期 11、秋学期 5）であった。延べ回答者数は 692 名、回答率は 87.26% で、全学平均（63.93%）と比較しても高いものとなった。

アンケートの設問項目別平均値についてであるが、まず I 群の「学生側の授業に対する取り組み」（6 項目）では、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は 97.76、「この授業に積極的に参加した（I2）」は 4.27 とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に参加したことがうかがえる。一方、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」は 3.55 と相対的に低く、学んだ内容について継続的に取り組む姿勢が養われているか疑問が残る。また、「授業時以外に学習した時間（I6）」が 1.39 となっており、4 割近くの学生が 1 時間未満と答えていることを考慮すると、総じて学生の授業への積極的な参加は認められるものの、予習・復習は限定的で、その場限りの学びに留まっている可能性は否定できない。

II 群の「授業の進め方について」（9 項目）では、全ての項目について 3.7 以上であったことから、教員の授業運営について学生の評価は概ね肯定的と言える。特に、「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」では 4.36 という高水準の評価を得ている。

III 群の「授業から得られたもの」（4 項目）については、いずれも 3.8 以上と比較的高かった。中でも、「自分にとって新しい考え方・発想（III1）」が最も高く 4.14 で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く 3.84 であった。新しい視点に触れ知的刺激は受けたが、そこからさらに深めていこうとする意欲にまでは繋がっていない可能性がある。

IV 群の「総合的評価」（4 項目）では、全項目において 4.0 前後の数値であることから、学生の授業に対する評価は高いと言ってよい。また、項目間相関の結果からは、「この授業を受けて満足した（IV4）」は「授業全体の目標が明確だった（IV2）」、「学問的興味をかきたてられた（IV3）」と強い相関関係にあることが示されており、ねらいの明確な設定や知的好奇心を刺激する工夫が重要なポイントであることがうかがえる。

授業規模別平均値において、50 名以下の授業を 51~100 名の授業と比較すると、「出席率（I1）」を除く全ての項目で高い数値となっており、小規模クラス編成による授業の効果が認められる。101~150 名の授業とは、1 年次自動登録選択科目（College Life Planning）を指しており、多くの項目が 4.0 以上の高評価を得ている中で、「授業をきっかけに発展的

な勉強をした（Ⅰ4）」、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識を得た（Ⅲ2）」、「学問的興味をかきたてられた（Ⅳ3）」は3.5前後に留まっている。これは授業の趣旨が学問的な学びを促進するというより、大学生活をいかに充実したものにするかに重点が置かれているためと考えられる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、必修科目である「言語・コミュニケーション研究入門」（2クラス）、「グローバル・スタディーズ研究入門」（2クラス）、「Cultural Exchange」（6クラス）を対象にグループ集計を行った。共通の目的を掲げた科目で、複数の教員が展開している授業を学生がどのように評価しているか現状を把握し、今後の改善に繋げることを目的としている。

3-2 グループ集計の結果の概要

「言語・コミュニケーション研究入門」と「グローバル・スタディーズ研究入門」は春・秋学期に1コマずつ開講される輪講形式の科目である。

「言語・コミュニケーション研究入門」で2クラスの平均値は、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（Ⅰ4）」、「シラバスは受講の役に立った（Ⅰ5）」、「板書のしかたが適切だった（Ⅱ7）」、「自分で調べ、考える姿勢（Ⅲ3）」を除く全ての項目において3.5以上の評価を得ている。比較的低い値を示したこれら4項目のうち、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（Ⅰ4）」は3.18と最も低く、継続的な学習に繋がっていない可能性が高い。春クラスと秋クラスで差が認められたのは、「授業時以外に学習した時間（Ⅰ6）」と「十分な静粛性が保たれた（Ⅱ5）」で、学習時間については、春（0.63）が秋（1.04）より短く、静粛性の保持において秋（3.35）は春（4.17）と比べ問題があることが分かる。

「グローバル・スタディーズ研究入門」における2クラスの平均値は、全ての項目において3.5以上の評価であった。「言語・コミュニケーション研究入門」では低い数値だった「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（Ⅰ4）」においても、3.88と大きな問題にはなっていない。ほぼ全ての項目について、秋クラスの評価が春クラスより高いという結果で、特にⅡ、Ⅲ、Ⅳ群では、全て4.0以上の高評価を得ている。

「Cultural Exchange」は英語で運営されている科目で、全クラスの平均値は全ての項目において3.5以上であったが、クラス間で評価に顕著な差も見られた。6クラスのうち、2つのクラスがほぼ全ての項目でグループ平均値を下回っており、評価のばらつきをどのように読み解き、いかに対処するかが今後の課題として挙げられよう。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

全般的に、学生からの肯定的評価に対する感謝や積極的参加を歓迎する記述が多い。一方で、取り組むべき優先課題として、より深い考察や発展的な学びに繋げることが肝要との指摘が複数あり、改善の余地があることも確認された。比較的評価の低かった項目については、教員は問題点を真摯に受け止め、取り組む姿勢があることが示されている。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

輪講科目では、「関心のなかったテーマに興味を持てた」などの肯定的コメントが寄せられている一方で、パワーポイントの資料を配布してほしいとの要求、私語への苦情、専門的内容（専門用語を含む）の難しさについても触れられていた。「Cultural Exchange」では、授業の進め方や運営に対して肯定的なコメントが多かったが、物足りなさや刺激の欠如（留学生や英語力の高い学生からと思われる）を訴えるコメントも散見された。その他のクラスにおいても、学生からの所見は概ね肯定的だったが、教科書への疑問や、学生間の討議を望む声もあった。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

輪講科目では、学生の関心の広がりを受けると同時に、コースとしての一貫性を担保する必要性についてコメントが複数見られた。また、学習環境の管理についても言及されていた。「Cultural Exchange」では、日本人学生と留学生が交流を通して学び合うことの有用性を認めつつも、日本人履修者の英語レベルに差があることから生じる問題点を指摘する声が多かった。その他の科目では、学生からの要望への対応策として、オンライン情報の活用、議論の場の提供などが挙げられていた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

改善に向けた今後の方針としては、教員間での情報共有、授業運営の工夫（学習環境の管理を含む）、ウェブの活用が挙げられよう。複数教員が担当する科目については、コースとしての「柱」をどこに求め、いかに学生の発展的学びを促すかについて考える必要がある。

5. 今後の改善に向けて

総じて肯定的な評価を得ているが、問題点も認められた。今後の改善に向けては、教員間の連携が鍵と思われる。特に、必修科目の課題としては、1) コースとしての一貫性、2) より深い理解の促進、3) 発展的学びの継続が浮き彫りとなった。輪講形式による科目では、異文化コミュニケーション研究における各教員の専門性の位置付けや意義を踏まえ、互いの関連性・補完性を意識した授業を展開することがコースとしての一貫性、ひいては学生の理解や発展的学習の促進に繋がると思われる、そのための話し合いが望まれる。「Cultural Exchange」については、効果的なクラス運営や学生間の英語力の差に対応するための方策を共有するなど、教員の協力体制づくりが求められよう。その他の科目においても、所見からは学生からの声にできる限り対応しようとする教員の姿勢がうかがえ、引き続き科目目標を達成するための努力に期待したい。また、全体的に参考文献・資料のアクセシビリティを高め、授業外での学習を促す意味でも、ウェブの積極的活用を推進していく。

4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

1. 科目選定方針とねらい

2017年度は、グローバル・リベラルアーツ・プログラム（以下、GLAP）の開設初年度であった。そのため、開講科目自体が少なく、さらに、「履修者5名以下となる演習系科目は実施対象外とする」との科目選定方針としたことから、「学生による授業評価アンケート」の対象科目は9科目にとどまった。

また、GLAPでは科目の履修者規模を最大でも40名におさえていることから、アンケート実施科目の履修者数は比較的少数であり、2017年度のアンケート回答者数（延べ）も100名に達していない。このため、比較対象となる過年度のデータがないこととともに、データ解釈にあたり特に慎重さが求められる。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照すると、1科目のみ、満足度（IV-4）と、わかりやすさ（IV-1）が目立って低いという結果であった。当該科目は、アンケート対象科目のうち唯一の必修科目であるため、他の選択科目である英語リベラルアーツ科目（以下、ELA科目）8科目とは単純には比較できないが、この結果についてはGLAP運営センターとしても重く受け止める必要がある。

ELA科目8科目については、アンケートの集計データを概観して、特に目立った問題点が傾向としてあるようには思われないが、GLAPの学生の中に、これらの科目における学修に何らかの問題を感じていた者が存在したことは、アカデミックアドバイザーとの面談などを通じて判明している。集計データの解釈にあたっては、もともと履修意欲が相対的に高いと考えられるGLAPの学生以外の履修者の存在も考慮にいれる必要があると考えられる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見では、学生参加型のインタラクティブな授業形態への言及が複数見られた。これは、GLAPのカリキュラムの重要な特徴の一つが、演習系科目のみならず講義系科目においても少人数制を維持し、できるだけ学生参加の要素が強い授業によって深い学修を実現しようとする点であることを科目担当者がよく理解していることの現れであり、今後の授業改善につながるものと考えられる。

ELA科目の担当者の所見の中には、履修者構成が複合的である（GLAPの学生その他、全学共通科目として同科目を履修する他学部学生や特別外国人学生を含む）ことに伴う授業運営上の困難さに言及したものが見られた。そうした履修者構成から生じる効果とともに、その難しさについても、注意がはらわれるべきであろう。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の意見では、学生参加型の授業をめざすGLAPの取組みが肯定的に受け止められていることを感じられるものが多かった。改善すべき点の記述でも、学生参加の要素をどうすれば強められるかといった前向きな観点からの指摘が見られた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見では、上述の学生の基本的に前向きな意見を受けて、自らの授業の取組みが学生に支持されたことを確認しつつ、学生の意見も踏まえてさらに改善の工夫をしたいとするのが基本傾向である。特に、学生の私語を抑えるのが困難であったと述べている所見も見られた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」、「記述による評価に対する担当教員の所見」での記載を受けて、授業運営方法の工夫をするという声が多く見られた。

4. 今後の改善に向けて

GLAP では、すべての科目で履修者数を少なくおさえ、学生参加の要素をできるだけ取り入れた形で英語による授業を実施するという新たな取組みを行っている。科目担当者個々のみならず、GLAP 運営センターとしても、この初年度の体験を踏まえ、本アンケートやアカデミックアドバイザーによる定期的な学生面談で得られる学生の意見も参照しつつ、今後の授業改善をはかっていくべきであるし、また改善しようとの認識をもっている。

2018年度は、今回アンケート対象となっている科目で2年目の授業が行われるとともに、カリキュラムの学年進行により、新たな科目も始まるので、引き続き、各科目の授業の状況を注視していかなければならないと考えている。

4-9 観光学部

1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- (1) 原則として学部方針によって選定する2年間のうちに全教員1回1科目で実施する。
- (2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (3) 複数教員担当科目は対象としない。
- (4) 集中講義は対象としない。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2017年度の実施科目は44科目、延べ回答者数は4,352名であった。ちなみに2016年度はそれぞれ83科目、8,091名であった。

集計データによる結果は、2016年度の傾向と概ね似通ったものである。授業の進め方に関する設問Ⅱ1～Ⅱ8（「該当しない」が約39%を占める設問Ⅱ7を除く）に対しては、約75%～82%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答、設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対しては、約87%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。さらに、総合的な評価に関する設問Ⅳ1～Ⅳ4に対して約70%～77%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。これらの結果から、学生が授業の進め方に関して高く評価しており、授業に概ね満足していることが読み取れる。

また、設問Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」で、全体の約65%の学生が「90%以上」、約28%の学生が「70-89%」の出席率と回答していることから、まじめに授業に出席して専ら教室で学ぼうとする真摯な姿勢は見て取れる。さらに、設問Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」ならびに設問Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」を得ることができたかについて、約75%の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。

一方、授業への取り組み方に関する設問Ⅰのうち、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」と設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対して、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生は、それぞれ約46%と約40%にとどまっている。このことは、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」について、70%近くの学生が「0時間」または「1時間未満」と回答していることに反映されている。学生が授業時以外の学習時間を持たない、または確保できなくなっていることは、設問Ⅲ3「自分で調べ考える姿勢」に対して「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が約54%にとどまっている結果にも表れており、授業を機会に自ら探究して知識を深めようとする意識は乏しい印象である。

学科別の結果（平均値）を比較すると、概ね学科間の差異は小さい。最も大きな差異は、設問Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」であり、その平均値は観光学科が4.12、交流文化学科が4.24で、学科間の差異は0.12のみであった。誤差の範囲とも言えるが、1科目あたりのアンケート延べ回答者数は観光学科103名、交流文化学科94名で、交流文化学科の方が若干少なかったため、静肅性の確保に繋がったのかもしれない。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

設問 I 3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、設問 I 4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、設問 I 6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」が概ね低調であることを受けた所見が見受けられた。これらの課題は、上述のとおり全体に横たわる傾向ではあるものの、個々の授業から取り組むべき課題であるということもでき、多くの教員もこの点の認識を強く示している。ただし、授業時以外の学習時間等に関する学生の回答の差は、課題を出す授業とそうでない授業の違い、さらには課題の内容の違いを反映していると考えられる。課題の有無や形態は授業の性格に応じて多様であるにもかかわらず、一律にこの点を問うことの意義について疑問を呈する教員もみられた。また、観光学部の特長の一つである、業界の第一線で活躍する兼任講師による所見では、学生のオフィスソフトのスキルやディベート能力の不足といった、今後の学部の教育内容に関する課題も合わせて指摘されている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

昨年度までと同様、肯定的評価とされる記述の多くに「…わかりやすかった」、「…面白かった」等の表現が頻出することは、学生が教室での授業に求める満足度と、教員が授業を通して学生に伝えようとしていることとの間に、意識のズレがある印象である。授業時以外の学習時間がほとんど確保できない学生の状況において、「わかりやすい」という意見を肯定的にのみ捉えて良いのかどうかについては依然として議論の余地がある。また、全体として肯定的評価も否定的評価も基本的にはテクニカルな内容が中心であり、参加型・対話型の授業、コメントペーパーへの対応、ゲストスピーカーの活用などについては総じて肯定的意見が多くみられる。

否定的評価とされる記述についても昨年度までと同様、内容・表現に粗雑なものも多く見受けられるとともに、教室で担当教員に直接申し出ることによって、その授業の実施中に改善または解決できる性質のものである（たとえば「声が聞き取りにくい」、「文字が小さい」、「パワーポイントのスピードが速い」など）。一方、教室の静粛性が保たれていない場合には、不規則な私語は周囲の学生の学習の権利を奪う行為であることを、教員が厳しく警告する必要がある。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

記述による評価への記載は分散的・個別的であったが、配布資料やパワーポイントおよび板書などの授業ツールに関して、分量や分かりやすさ、使い分けに関する評価が、学生の受け止め方と教員の考え方の間で一致していないケースが見受けられる。そうした問題に対して多くの教員が授業方法の意図を明示するなど対処しており、各教員の試行錯誤の様子がうかがえる所見が多い。こうした例に代表されるように、授業評価が、授業の質を保証することに一定の効果を発揮していることは所見から確認でき、記述による適切な評価は教員の励ましとなっている。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員は、授業評価と記述による評価をもとに、パワーポイントや配布資料、板書などについてきめ細やかな改善を継続的に施している。そのような中で「わかりやすさ」を追求する学生の姿勢にどこまで応じるべきかという問題とともに、記述による評価においては正反対の意見・要望があることから、授業の枠組み・位置づけ、配当年次、教室サイズ等に応じて、授業方法を柔軟に組み立てることもまた求められる。

4. 今後の改善に向けて

これまでも本欄では、「授業時以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ため、「教えすぎない」「疑問を残す」など、時にはよい意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫」について述べている。この点は、アンケートの最終項目にある「満足度」が本当に授業評価の指標として適切なのかどうかということともかかわるが、これらの問題は教育の質を高めるための基本課題として引き続き実践と検証が求められるものと考えられる。近年の学生の気質とともに、学生を取り巻く社会状況の変化を考慮したとしても、授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを充分獲得できないことを、自習時間を含む単位制度の考え方とともに、学生に繰り返し丁寧に伝えていく必要がある。

4-10 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2017年度の科目選定の基準は、以下の通りとした。(1) 学部専任教員(助教含む)1科目以下の実施を原則とする、(2) 資格科目を優先する、(3) 演習科目は対象外とする、(4) 昨年度実施科目を優先する。この結果、32科目において、授業評価アンケートが実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 全体集計にみられる結果

学部全体をみると「授業全体を通じての出席率」(I1)の平均値は、91.62となっており、高い値を示している。また、総合的な評価項目とも言えるIVにおいては、「わかりやすい授業だった」(IV1)は平均値が4.00、「授業全体の目標が明確だった」(IV2)4.06、「この授業を受けて満足した」(IV4)4.00と、いずれも高い評価となった。なお全項目中、最も高い平均値を示したのは、「教員は授業の準備を周到に行っていた」(II9)で、4.27であった。

従来から課題とされてきた、学生が自ら学び、考えるという主体的学習態度の涵養という点からは、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4)は、各年度の対象科目等が異なるため、単純な比較はできないものの2016年度3.34→2017年度3.31、「自分で調べ、考える姿勢」(III3)は2016年度3.62→2017年度3.63と低位のままほぼ横ばいで推移しており、依然として課題のまま存在し続けている。

ここ数年間で最も改善された項目としては、II授業の進め方に関する項目中の「十分な静粛性が保たれた」(II5)であり、2014年度3.99→2015年度4.02→2016年度4.08→2017年度4.17と推移している。この項目を授業規模別にみると、50名以下で4.47、51~100名で4.16、101~150名で4.10となっており、静粛性の保持がクラスサイズに比例していることが見て取れるが、同時に、100名以上の大規模クラスにおいても、静粛性が保たれていることが分かる。2015年度より学生の私語発生防止等授業の静粛性保持をテーマにFD活動を展開してきたが、その後も適宜、学部全体での情報交換や注意喚起を継続して行い、さらに各々の教員が授業で創意工夫を実践してきた成果であると考えられる。

他方で、授業への学生自身の取り組み方については、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(I3)2015年度3.41→2016年度3.47→2017年度3.50、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4)2015年度3.29→2016年度3.34→2017年度3.31といずれも着実な改善がみられたとは言い難く、とりわけ「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(I6)は2016年度0.91→2017年度0.86とさらに時間数が減少する結果となってしまっている。この項目の回答分布をみると、3時間以上を選択した者は全体の4.7%余に留まり、2~3時間が約8.7%、1~2時間が19.0%、1時間未満が38.6%、0時間が28.9%に上っている。なお学年別平均値をみると、1年生0.86、2年生0.80、3年生0.93、4年生0.98となっており、学年ごとの回答者数が均等ではないが、概ね学年が上昇すると共に、授業時間外学習が増加する傾向も読み取れるようである。現行シラバスにおいては、各々の科目ごとに、「授業時間外(予習・復習等)の学習」の項目が書き込まれるようになっているが、前述した主体的学習態度の涵養と併せ、何らかの対応策を検討すべき時期が到来しているように考えられる。

2-2 学科等別集計にみられる結果

福祉学科では、配布資料や視聴覚教材が重視されており、授業内容の明確性と授業の満足度に相関性が認められた。

コミュニティ政策学科では、授業の量・内容や授業で扱った基本的な専門知識と、学問的興味喚起の項目間に高い関連性がみられた。

スポーツウエルネス学科では、教員の授業の進め方の中で視聴覚教材が重視されており、授業全体の目標の明確性が評価されていた。

3 学科に共通した授業の満足度とその他の設問項目の関連をみると、授業の量や内容の明確さはもとより、授業内容から得た新たな視点や普遍的意味に興味関心を抱いていることがうかがわれるが、学生自身の授業準備や授業をきっかけにした発展学習、授業時間外の学習との関連性が弱く、課題があることが示されている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「概ね妥当な評価である」とする記述が多く、総合評価（Ⅳ）を裏付ける結果と言える。多くの教員から、高い出席率や静謐な環境保持、真面目な受講態度を評価する声が多かった。その一方で、「授業をきっかけにした発展的学習」（Ⅰ4）や「自分で調べ、考える姿勢」（Ⅲ3）等、学生の主体的学習態度に関する項目が、相対的に低い数値であることを問題視する教員が少なくなかった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

全体的に記述が少なく、学生の声を十分に反映しているかどうか疑問もあるようだが、視聴覚教材の活用やゲストスピーカー招請については、概ね肯定的評価がなされていた。また、授業の理解度を深めるため、教材を穴埋め式にしたり、授業内討論やリアクシオンペーパーの紹介・フィードバック等、学生参加をさまざまな形で導入した授業方法の工夫についても、概ね好評価が寄せられたとの記載が多かった。

否定的な記述は少なかったが、専門用語や多義的項目に要する説明時間やリアクシオンペーパー記入のための時間配分、配布資料の多寡等についても、肯定的な評価と全く相反する否定的な評価が双方存在したとの記述が、複数の教員から寄せられている。学生の受け止め方が一様ではない事例と受け取れる。

なお、私語等静粛性が保たれていないとする指摘は、記述コメントには殆どみられず、学生の遅刻や途中退出についても、さほど目立った指摘はなされていなかった。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

福祉学科においては、国家資格受験資格取得のための指定科目が多くを占め、授業内容が制約を受ける中であっても、創意工夫の必要性があるとの記載が目立った。

全体を通じて、学生のより主体的な学習態度を引き出すために、専門知識が十分備わっていなくても興味を持てるトピックを盛り込むことや、映像等を活用して理論と事例を結びつける工夫、各回の授業の関連性を説明する必要性、学生自身が新たな気づきを見出せ

る課題の提示方策、授業全体を貫く基本的価値や知識の反復教示、時代の変化に見合った補助教材の開発等のアイデアも寄せられている。総じて、学生との相互対話的学習が目指されていると考えられる。

以上のような記述から、多くの教員が、授業評価アンケートの結果を真摯に受け止め、従来の授業により良い改善を加える方策を検討していると結論づけることができる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

若干繰り返しになるが、①学生がより理解しやすい授業を目指す、②学生にとって新たな知的想像力を喚起する工夫を行う、③学生が自ら主体的に学べる環境を創る、との観点から、授業内容及び教授法のさらなる改善を図ろうとする意見が大半であった。このため、現実社会に生起する諸問題を学生自身がリアリティをもって捉えられるよう、視聴覚教材やゲストスピーカーの活用については、引き続き継続したいとする意見が数多くみられた。またオンライン授業支援システム Blackboard の有効活用、リアクションペーパー紹介等を含めて、教員と学生の双方向性をきめ細く深めたいとする回答も多くみられた。

なお、受講生の規模と教室環境の改善について言及する内容も若干あり、今後も教務事務センター等と連携を深め、改善を実効性あるものとしていきたい。

4. 今後の改善に向けて

以上述べてきた各教員の授業評価アンケートに対する真摯なコメントを、学部全体の教員で共有化すべく、必要事項に関しては、FD 活動等に積極的に活かしていくことが望まれるであろう。

授業内における私語等が、数年をかけた取り組みを行い、多様な工夫を蓄積する中で、徐々に静謐な授業環境が保たれるような効果を生んだとすれば、学部全体の改善活動等の意義が示された事項として高く評価されるものであろう。

一方、学生の主体的学習態度の涵養に課題があることについては、数年来、同内容が指摘され続けており、一挙に解決する万能な方策は見つかり難いものの、何らかの対応に向けての協議や、各教員が創意工夫している個別の成功事例等を共有する方策も考えられる。

なお、一部の科目においては、履修者数と回答者数の乖離が相当存在する科目もあったが、これらの要因も分析する必要があるかもしれない。

何れにしても、本学部においては、学部構成や新カリキュラム改正等の課題もある中で、貴重な意見が寄せられた授業評価アンケートを活用し、より現実的な改善方策を探究していくことが求められていると言えよう。

4-1-1 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目）」全科目
- (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」
- (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」

なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象外とした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照すると、今回の回答率は 69.82% で前年度からさらに向上し、大学全体の平均を上回る値となった。7 割近い回答率であり、データとしての信頼度は従来通り確保されていると考えられる。学部における傾向をみると、「Ⅰ：授業への取り組み方」については、「Ⅰ1：授業への出席率」に 90% 以上と回答した学生が 6 割を超え、70-89% と回答した学生を加えると 9 割以上を占めており、昨年度と同様に高い値であった。授業への積極的な参加に関しては、「Ⅰ2：授業に積極的に参加した」の設問に対して「大いにそう思う」、「そう思う」と回答した学生が昨年度同様 7 割を超え、意欲的に取り組んでいる様子が見えられた。しかしながら、「Ⅰ3：授業への準備」、「Ⅰ4：授業をきっかけにした発展的勉強」については、昨年度に引き続き低い値であった。授業内に限らず、授業を超えた自主的な学びを導くためには、授業外学習に具体的に関連付けた授業内の工夫が必要と思われる。

「Ⅱ：授業の進め方」に関しては、昨年度に引き続き「Ⅱ8：映像視覚教材の効果的使用」と「Ⅱ9：教員は授業の準備を周到に行っていた」が高い評価を受けている（前者は、映像視覚教材を用いない科目もあるので「該当しない」も約 1.4 割を占めた）。逆に、評価が高くなかったのは、「Ⅱ6：教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」と「Ⅱ7：板書のしかた」であった。ただし、「Ⅱ7：板書のしかた」に関しては「該当しない」との回答が 4 割を超えていたことから、多くの授業でパワーポイントの使用率が高くなっていることが読み取れるが、授業が予定調和的に進行し、目の前の学生の理解の状況や反応に即応しにくくなる懸念もある。パワーポイントを使用する場合、板書とのバランス等を考慮する必要があると思われる。また、パワーポイントを使用する場合にも、学生のさらなる学びに効果的な授業レジュメプリントの活用が求められる結果となった。

「Ⅲ：この授業から得ることができたもの」については、「Ⅲ1：自分にとって新しい考え方や発想」、「Ⅲ2：授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が、昨年度と同様に得点が高く、授業を通じて、押さえるべき基礎的な知識および応用的、発展的な学びや発想の双方を学生が獲得できたと考えていることがわかる。ただし、「Ⅲ3：自分で調べ、考える姿勢」が昨年度同様、他の項目に比べて低い状況であり、これは前述の「Ⅰ4：授業をきっかけにした発展的勉強」の低さと連動しているのではないかと考えられる。加えて、学生自身が主体的に問題提起をするなり、自ら十分に思考するまでには至っていないようにも思われる。学生が受け身にならずに、主体的な学びを促進するような工夫が授業に求められているといえる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員からは、授業を行った側として、緻密で具体的な内容に基づく所見が提出されていた。学生の回答を受けて、今後どのような工夫をすることで、学生の意欲を引き出しながら授業の効果を高められるかを具体的に検討するための作業についてまとめたような所見が多く、教員たちがアンケート結果を活かしていこうとする姿勢が見受けられた。また、担当教員の所見を通して、学生の積極的な授業参加を促すために、授業中のワークや資料提示の仕方などについて、既にさまざまな工夫を行っていることが確認できる。それゆえ、概ね事前に立てた目標は達成された、予想通りの結果であった、というのが、「授業評価に対する担当教員の所見」の基調であったと考えられる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の意見では、ビデオなどの映像教材やパワーポイント、配布資料を活用した授業に対して、理解が進んだなどの肯定的な意見が多かった。しかしながら、上記のような視覚教材を用いれば良いというわけではなく、パワーポイントの構成によっては情報量が多すぎて重点がわからなくなるなど、学びの阻害になっていたとの改善要望も寄せられた（その分、前回の復習に充てる時間が長くなってしまい、あるいは大量の映像を用いるために授業開始時間が少し遅れるなどのマイナス面も指摘されていた）。また、配布資料に関しては、予め目を通しておきたいのでオンライン授業支援システムの Blackboard にアップしてほしいという希望や、書き込みができるように余白を大きくしてほしいなど、学生が最大限自身の学びに活かそうとしている記述が目立った。学生が記入したリアクションペーパーに教員が返答をすることによって、学生は大人数の授業であってもインタラクションがある授業であると好意的に捉えていた。

一方、昨年度と同様、授業の環境面に対する否定的な意見が目についた。授業規模と教室サイズとのアンバランス、室温設定の不適切、静音環境が維持されていないといった意見である。しかしながら、昨年度否定的意見の多かった四半期科目については、各教員がそれぞれに創意工夫を行ったことで学生の学習意欲が高まり、肯定的意見が増えたことは非常に良かった点である。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見は内容も具体的で細やかな内容にまで及ぶものも多くあり、学生からの指摘に対して、各々の教員がきちんと応答しつつ所見を述べている様子が見える。特に、視覚教材や配布資料、Blackboard などのウェブの効果的な活用、板書の工夫などについて各教員が具体的な改善案を述べていた。授業中の学生の反応やリアクションペーパーの内容などを受け、教員は授業の内容や運営について、ある程度調整したり工夫を重ねたりしていくものだが、やはり授業評価アンケートを通じた学生の具体的な記述による指摘は、教員の授業の質の向上に対する意欲を高めるとともに、改善に向けた具体的な取り組みの思考を促す動因として、重要な機能を果たしていると思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

それぞれの教員が、学生の指摘に対して、真摯に応答して具体策を述べていた。例えば、発展的学習やアクティブ・ラーニングなどの能動的学びを促す仕掛け、仕組みづくりに関して、改善方針を記す教員が多かった。集計データにみられる結果から見出される課題に対応し、各教員が今後の改善に向けて工夫をしていこうという姿勢が見受けられた。

4. 今後の改善に向けて

例年通り、学生の授業出席率も高く、積極的な授業参加者も7割を超えて意欲的に取り組んでいるにも関わらず、授業内外での学生の主体的な学びを促進することや、授業を契機に発展的な学習を促す仕組みを構築することに関して課題を残す結果となった。本学部の様々な授業において、ゲストスピーカーの活用や、学生間および教員・学生間でのディスカッションを設ける、グループワークを取り入れるなどのアクティブな試みを行って授業運営がなされていることが所見票からわかった。このように各教員が科目に合わせた工夫を重ねて学生の学びを促進しようとする努力は、引き続き重要であることは確かといえる。そのことに加え、前年度にも今後の改善に向けての具体策として挙げられた、各教員が個別の授業を超えて、もしくはそれらを連携させて、関連授業間で相互参照しつつ講義を行うなど、新たな工夫の検討についても、引き続き探っていきたいと考えている。

4-12 全学共通カリキュラム運営センター

1. 科目選定方針とねらい

2017年度の全学共通科目では、

- (1) 総合系科目「学びの精神」(FH)
- (2) 総合系科目「多彩な学び」の以下5カテゴリにおける講義系科目
 - ①人間の探究 (FA)、②社会への視点 (FB)、③芸術・文化への招待 (FC)、
 - ④心身への着目 (FD)、⑤自然の理解 (FE)

を対象に1教員1科目、また、

- (3) 総合系科目「多彩な学び：⑥知識の現場 (FV)」におけるグローバル教育センターが提供する全科目

を対象に、授業評価アンケートを実施した。実施合計は332科目であった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2017年度の全学共通科目の履修者数は、延べ37,321名で、各学部開講科目よりも多いのは当然であるが、回答率は66.09%で、全学平均63.93%よりも少し高い。昨年度回答率64.30%よりも微増であるが、大きな変化はない。学年ごとの回答者数は、1年次生10,051名、2年次生7,407名、3年次生4,451名、4年次生2,086名である。

授業への取り組み方(I)を見ると、出席率(I1)は昨年度の91.63から92.08と改善されており、他(I2)～(I5)の項目も微増している。特に、シラバスは受講に役立った(I5)に関しては、3.62から3.70とかなり向上し、教員の改善の努力の結果が見られる。また、学生の履修にあたっての準備(I3)が3.31から3.38、授業時以外の学習時間(I6)も昨年度に比べ0.03伸びている。

授業の進め方(II)に関しては、すべての設問項目に関して昨年度より0.05前後改善されており、教員が授業の進め方に関してかなり努力を続けていることがうかがえる。全学共通科目内を各カテゴリ別に見てみると、「多彩な学び」のカテゴリ6「知識の現場(FV)」が傑出しており、その理由は各カテゴリの総評で分析されている通りである。カテゴリ4「心身への着目(FD)」も全体として優れており、特に話し方(II1)、内容の量(II2)、ねらいの明確さ(II3)、内容の明確さ(II4)で他のカテゴリよりもかなり高評価を得ている。他方、「学びの精神(FH)」とカテゴリ3「芸術・文化への招待(FC)」の評価はやや低かった。カテゴリ3は、教員の授業準備の周到さ(II9)において他のカテゴリよりもやや低いが、話し方(II1)、ねらいの明確さ(II3)、内容の明確さ(II4)、教科書・レジュメ・参考文献(II6)が、「学びの精神(FH)」を含め、他のカテゴリよりもかなり低く、教員の教育スキルを向上させる機会があると良いと思われる。

この授業から得ることができたもの(III)は、昨年度と比べて全項目で0.05前後改善されており、自分で調べ考える姿勢(III3)が向上しているのは大変に良い傾向である。総合的にみて(IV)の評価も、同じく、それぞれ0.05ほど改善されており、わかりやすく目標の明確な講義が実現されていることが分かる。しかし、学問的興味をかきたてられた(IV3)に関しては向上しているものの、他の設問項目と比較すると評価が低い。探究心や知的好奇心を刺激するための授業の工夫がさらに求められるだろう。

学部等による設問(V)における、教室の大きさ(V1)、受講者数(V2)、教室環境・

設備（V3）は、昨年度と比べて改善傾向にある。また、授業規模別で見ると、学生の授業への取り組み方（I）は151名以上の大規模クラスよりも、51～100名、101～150名の中規模クラスの方が低くなっている。授業の進め方（II）は、同じく全项目的に101～150名のクラスがもっとも評価が低かった。教員の授業準備（II9）に関しての差よりも大きな差が他の項目でも生じていることから、教員の授業内容の準備の問題よりも、この規模の大きさの講義を運営するスキル上の問題であるように思われる。総合的な評価（IV）も同様に中規模クラスで低くなっており、原因はこの統計や所見からは完全に分析できない。少人数でも大規模でもない中規模クラスでの教えるにくさや、教室環境の問題、学生補助の不足などより細かい分析が必要とされる。大規模クラスではやはり静肅性は低下し、所見でも私語への対応に苦慮する教員が多く見られる。

学年別での平均値を見ると、授業への取り組み方（I）としては、出席率（I1）や参加の積極性（I2）、授業準備（I3）などには大きな差はないが、発展的な勉強（I4）やシラバスの利用（I5）に関しては学年が上がるにつれて向上している。すなわち、学年が上がるにつれて、大学での学問の仕方の理解が深まり、シラバスの読み方や授業外での展開の仕方が向上すると言える。授業の進め方（II）に関しても、全般的に学年が上がるにつれて評価が上がっていく。授業から得ることができたもの（III）や総合的な評価（IV）も同様である。この結果を見ると、個々の教員が授業改善する努力も必要とはいえ、学生が大学での学びに関する理解や方法をいかに十分に獲得しているか、言い換えれば大学での学問のあり方に慣れてきているかが、授業の評価を上げることに繋がっている。したがって、重要なのは高校と大学での学びの違いを埋める導入教育・ブリッジ教育である。入門演習などでの大学での学びへの姿勢、学びのスキル、自発的な学びへの動機付けが、現在よりも授業評価を高める上で重要であろう。

3. 各カテゴリの総評

3-1 学びの精神（FH）

2年目を迎えた1年次生対象の「学びの精神（FH）」は、大学での学びのスキルを身につけ、主体的に学ぶ姿勢を養い、立教生として居場所感を醸成することを目的としている。授業時以外の学習時間（I6）は、2016年度は0.68と少なく、学びの精神の趣旨が徹底されていないのではないかと懸念があったが、2017年度は0.75に増加しており、少し改善が見られた。しかし、全学共通科目全体の結果（0.85）や、1年次生だけの結果（0.82）と比べると学習時間は少なかった。

2017年度の授業の進め方（II）では、すべての項目で学生からの評価が上がっており、さらに担当者には趣旨の徹底を図り、課題の提出や授業補助者の活用などを促していることで、より一層の改善に期待している。

授業から得たもの（III）と総合評価（IV）についても、全設問項目で改善が進んでいる。授業満足度（IV4）は、2016年度は3.82だったが、2017年度は3.96まで上昇してきている。「学びの精神」と同じ授業形態の「多彩な学び」カテゴリ1～5の結果（3.95～4.20）や全学共通科目を履修した1年次生の結果（3.98）と比べても遜色がないので、一定の評価は得られていると思われる。

高校と大学の学びの違いを感じた（V4）についても、4.13と2016年度より高い評価を

受けているが、大学で学ぶ心構えができた（V5）については、それよりも0.3ほど低い評価であったことは変わらず、2017年度も違いは分かったが心構えができたとまでは言えないと感じている学生が多いことを示している。授業満足度（IV4）とこれら2つの設問は比較的強い正の相関が見られるので、授業満足度が高いほど大学での学びとは何かを理解し、秋学期以降の学びの自信につながっていると考えることができる。

2016年度に一新した学びの体系 RIKKYO Learning Style(学士課程統合カリキュラム)が2018年度は3年目となるので、今後はより建設的に検証していかなければならない。1年次に履修する科目は「学びの精神」だけではないため、学生が「学びの精神」をどのように位置付けているのか、「学びの精神」がその後の学びにどのような影響を与えるのか、卒業時に振り返ってみて「学びの精神」が役立ったと感じているのかなどを問うことが必要になってくるだろう。

3-2 多彩な学び

1) 人間の探究 (FA)

「人間の探究 (FA)」を、「多彩な学び」カテゴリ 1~5 の結果と比較した場合に特徴的であるのは以下の点である。授業への取り組み方 (I) について、授業の出席率 (I1) がもっとも低く、授業への積極的な参加 (I2) の度合いももっとも低い。しかし、授業時以外に学習した時間 (I6) がもっとも長い。授業の進め方 (II) については、聞きやすい話し方 (II1) と授業のねらいが明確か (II3) がやや低い。授業から得ることができたもの (III) に関しては、平均的である。総合的にみて (IV) については、わかりやすさ (IV1)、目標の明確さ (IV2)、学問的興味をかきたてられた (IV3) がやや低めである。

各項目との相関を見ると、授業の進め方 (II) における授業内容の分量の適切さ (II2) が、授業のねらい (II3) と内容の明確さ (II4) と強く相関している。所見でも、パワーポイントなどの提示内容の多さが授業の明確さを減じてしまったとの反省がいくつか見られた。そして、この授業のねらい (II3) と明確さ (II4) が、総合評価のわかりやすさ (IV1) と目標の明確さ (IV2) とも相関しており、授業内容を精選することによって、その授業のねらいや内容が明確になっていき、それによって授業がわかりやすく、目標もはっきり伝わるが見えてとれる。授業から得たもの (III) については、自分にとっての新しい考え方・発想 (III1) が基本的な専門知識 (III2) と現代に通じる普遍的な意味 (III4) と強く相関している。これは、授業の内容が自分のこととして自らの考えや発想を変えていくことが、その分野の基本知識と意義との理解に関連しているということであり、学生生活とその授業での内容が地続きに感じられるような説明が講義で求められていることであろう。所見において、歴史や古典研究の授業などでそのような回答があり、現在の自分の生活と遠いと学生が感じる場合に、どのようにその距離を縮めるのが課題となるだろう。また、視聴覚教材を適切に利用することが、わかりやすさや内容の身近さにつながっていくことが理解される。ゲストスピーカーの招聘は講義への関心を保つのに有効である。

私語に関しては、大教室でも静粛性が保たれている場合もあるが、数件は私語が多く静粛性が阻害されているという回答があった。所見からは、視聴覚教材を効果的に使用したインタラクティブな学びが行われている場合、大教室でも静粛である傾向にあると思われる。

2) 社会への視点 (FB)

「社会への視点 (FB)」は、概ね全学共通科目の平均を上回る結果となっており、担当教員による改善の成果を確認できる。但し、2016年度報告書において、平均を下回っていると指摘されていた2つの課題点、教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった(Ⅱ6)と、映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった(Ⅱ8)では、前者については改善されたものの、後者については今回も平均を下回る結果となった。引き続き次年度の結果を注視する必要がある。また、授業全体を通しての出席率(Ⅰ1)、この授業に積極的に参加した(Ⅰ2)、この授業の履修にあたって十分な準備ができていた(Ⅰ3)についても、いずれも全学共通科目の平均を下回る結果となっており、同じく注視が必要な状況にある。一方、2016年度報告書において平均を下回っているとして課題とされた、学部等による設問(V)(教室の大きさ、受講者数、環境設備)では、2017年度にはすべて平均を上回る結果となり、大学全体としての改善への取り組みの成果が表れた結果となった。継続的に学生からの声を拾い集め、担当教員との緊密な連携とともに、適切な受講環境の整備に努めていくことが大学全体として求められている。

所見票からは、上記のアンケート調査結果から導き出される諸点について、より具体的な問題点および改善点が明らかにされている。問題点の例としては、アンケート調査結果において平均を下回っていた、授業全体を通しての出席率(Ⅰ1)、この授業に積極的に参加した(Ⅰ2)、この授業の履修にあたって十分な準備ができていた(Ⅰ3)に関連して、担当教員自身からも受講生に対して、より積極的な講義への参画の必要性を指摘する所見が散見された。この件に関して、次年度に向けた改善の取り組みを挙げている教員もあり、次年度の結果を注視する必要がある。一方、2016年度から大きく改善された、学部等による設問(V)(教室の大きさ、受講者数、環境設備)に関連して、大学全体による適切な受講環境の整備とともに、担当教員自身も前年度の指摘を受けて、講義時の声量や話し方に工夫を凝らすといった、具体的な取り組みの詳細について確認することができる。また、所見票では、私語に関する記載は皆無であり、そのことはアンケート調査結果における、十分な静粛性が保たれた(Ⅱ5)の数値の高さを裏付けるものであるといえる。今後も、問題点の洗い出しと改善、そして改善点の継続と恒常化に向けての一層の努力が、担当教員及び大学全体として重要であると考えられる。

3) 芸術・文化への招待 (FC)

「芸術・文化への招待 (FC)」を、「多彩な学び」カテゴリ 1~5の結果と比較した場合に特徴的であるのは以下の点である。授業への取り組み方(Ⅰ)について、授業の出席率(Ⅰ1)がやや低く、授業への積極的な参加(Ⅰ2)の度合いも低い。授業の進め方(Ⅱ)については、聞きやすい話し方(Ⅱ1)と授業のねらいが明確か(Ⅱ3)がもっとも低い。授業から得ることができたもの(Ⅲ)に関しては、全体的に低調である。総合的にみて(Ⅳ)については、わかりやすさ(Ⅳ1)、目標の明確さ(Ⅳ2)がもっとも低く、学問的興味をかきたてられた(Ⅳ3)もかなり低めである。

各項目との相関を見ると、授業の進め方(Ⅱ)における、授業のねらい(Ⅱ3)と内容の明確さ(Ⅱ4)がきわめて強く相関していることから、授業での全体のプランが学生にとって理解を促進するものであることが見てとれる。各回の授業のねらいの明確さ(Ⅱ3)は、

総合評価の授業全体の目標の明確さ (IV2) と関連している。授業内容の明確さ (II4) は、総合評価の授業全体の目標の明確さ (IV2) と学問的興味をかきたてられた (IV3) と関連している。授業から得たもの (III) については、際立った相関はない。

所見では、いまだに私語による授業環境の悪化を訴えるものが目立つ。欠席者や遅刻者が多いことに問題を感じている教員の所見もあった。学生に対しては、多くの問題点の指摘がなされている。特に、授業支援システム Blackboard の使用方法や事前の注意、準備事項などを把握していない学生が多いこと、スマホの使用や私語を注意することによる授業の雰囲気悪化、リアクションペーパーの回答の不真面目さである。これらについては、厳しい対処を全学的に徹底していく必要があると思われると同時に、これらの違反行為を成績に直ちに反映させることが有効と思われる。

4) 心身への着目 (FD)

「心身への着目 (FD)」は 30 科目でアンケートが実施され、2017 年度の回答者数は 3,147 名であった。I～V の設問の多くの項目で、全学共通科目の平均を上回る結果となっており、授業内容が適切で効果的に授業運営がなされていたことや、担当教員の努力が認められた結果と判断できる。しかしながら、授業時以外に学習した時間 (I6) や自分で調べ、考える姿勢 (III3) はそれぞれ 0.76、3.53 と平均よりも低く、また前年度からの大きな上昇も見られないため、授業以外の時間にもより自主的に学習できるような仕組みづくりが必要と考えられる。所見票を見ると、チャレンジ課題や小テストの導入が良いのではとの意見もあったので、この点に関しては、担当教員と情報を共有して改善に取り組んでいきたいと思う。また、相関係数表を見ると、多くの項目で授業の進め方 (II) と比較的強い相関が見られた。特に、授業のねらい (II3) と授業内容の明確さ (II4) の相関がもっとも強かったことから、担当教員が魅力ある授業内容を計画し、洗練していたことが分かる結果となっている。

一方、所見票を見ると、概ね高い評価を受け、担当教員も満足しているとの記述が多く見られた。映像資料やパワーポイント資料を工夫し、有効的であったことを具体的に挙げて授業改善に取り組んだ事項を示す教員も多く、周到な準備を進めている様子が伺える。しかし、大人数授業での私語や前の席に座らず、後ろの席に座る学生が気になり、注意を促すが効果が無いことや、注意をし過ぎると逆に別の学生からクレームがくることを述べる所見も散見されるため、出来る限り皆が納得し、落ち着いて受講できる教室規模や履修者数の適正化など、引き続き授業環境に関して改善を検討することが望まれる。

5) 自然への理解 (FE)

「自然への理解 (FE)」における各設問の評点は、多くの項目で全学共通科目の平均を上回る結果となっている。

授業への取り組み方 (I) については、授業全体を通じての出席率 (I1) と授業の積極的参加 (I2) が平均をやや下回ったものの、その他は平均以上となっている。但し、(I2)～(I4) の評価は 4.00 以下であり、(I6) は 1.00 以下となっており、受講者の取り組みは決して満足すべきものではないように思われる。各教員のコメントから、基礎知識のばらつき幅が大きい中で受講者の積極的な取り組みを促す試みが行われていることがうか

がえるが、更に工夫がなされることが期待される。

授業の進め方(Ⅱ)については、教科書・レジュメプリント・参考文献が効果的だった(Ⅱ6)と板書のしかたが適切だった(Ⅱ7)を除いて4.00を上回っており、担当教員が周到な準備により授業を行っていることが示されている。静粛性(Ⅱ5)については、授業規模が大きくなると評価が低くなっているが、大規模授業でも静粛性が保たれている例も見受けられる。一方、中規模クラスにおいては少しの私語でも全体的に大きな騒音となるというコメントがあった。また、学生からの私語に対する不満や私語への注意の仕方について苦慮するコメントも見受けられた。なお、映像視覚教材の使用(Ⅱ8)についての評価が高い一方、板書のしかた(Ⅱ7)についての評価は全学共通科目の平均は上回っているもののあまり高くない。教員のコメントを見てもこの点には苦慮しているようである。

授業から得ることができたもの(Ⅲ)については、どの項目も他の全学共通科目の平均よりも高い評価が得られた。Ⅰ～Ⅴの全設問項目間で比較すると、自分で調べ、考える姿勢(Ⅲ3)が若干低いように見受けられる。これは、授業をきっかけにして発展的な勉強をした(Ⅰ4)の評価が低いことと関連しているように思われるが、受講者に積極的に興味を持ってもらう工夫が必要であろう。

総合的評価(Ⅳ)を見ると、文科系分野の受講者の割合が多い中で総合的には良い評価が得られているようである。満足度(Ⅳ1)も比較的高く、分野の違う受講者にも十分に意義のある授業が展開されている結果であろう。

なお、学部等による設問(Ⅴ)については、教室の大きさや受講者数は概ね適正と思われるが、不満を示すコメントもあった。

「自然の理解(ⅤE)」全体として、担当教員の工夫・努力により一定レベルの授業が展開されていることが分かる。

6) 知識の現場(Ⅴ)

全学共通科目の平均値に比べて、昨年度同様に各項目の評価は非常に高く、昨年度を超える数値は期待しにくいと2016年度報告書に記述したが、予想に反してさらに伸びている。ほとんどの授業が定員を設けた少人数科目で、勉強意欲の高い学生が集まっていることを割り引いても、驚異的な結果である。特にGL101は、学生の負担が大きいことが授業時以外の学習時間(Ⅰ6)が群を抜いて高いことにも表れており、この努力に担当教員がしっかり応えていることが所見票からも伝わってくる。学生が積極的にかかわっている科目群なので、授業から得られるものが大きく、2017度はさらにわかりやすく、より興味をかき立てられ、大いに満足したことが総合評価(Ⅳ)から読み取れる。それだけに、この授業にかける教員と学生の情熱に並々ならぬものが感じられ、現行の2単位では少ないと単位数の増加を望む声が上がっているのは当然の成り行きかもしれない。GL201では学生の負担は少し軽減されているようだが、満足度(Ⅳ4)を含む総合評価(Ⅳ)は、GL101と同様に高い。但し、これらの授業の担当教員の一部は、TA・SAの仕事内容や能力にも高い期待をかけているのではないかと懸念が感じられる。

一方、英語で実施されている授業では、魅力的な授業内容や教員の熱意があるにもかかわらず、受講者数が少ないのが残念である。シラバスや広報活動などを通して、学生に伝わるような工夫が望まれる。また、回答した学生の評価にばらつきが目立ち、授業の内容

や進行と履修学生の意欲や能力に隔たりがある表れなのかもしれない。少人数科目なので、双方の理解と歩み寄りによって改善できるのではないだろうか。

4. 今後の改善に向けて

全体的に、全学共通科目の評価は上がっている。各担当教員の改善のための努力の成果である。しかし、2017年度の授業評価の分析からは、以下が改善すべき点として明らかになった。

一つ目に、クラス規模について少人数クラスでの授業が優れていることは明らかであるが、151名以上の大規模クラスよりも51～150名の中規模クラスで授業評価が低くなっていることに注目すべきである。教員が教える内容がほぼ同じであるとするならば、大きな規模のクラスよりもむしろこの大きさのクラスに教えるにくさ、学ぶにくさなど、クラス規模にマッチした授業方法や教授のための環境に問題があると考えられる。教授スキル、教室環境の問題、学生補助の不足などより細かい分析が必要とされる。

二つ目に、個々の教員の教育方法の向上を求めることも大切であるが、学年が上がるにつれて授業評価は向上し、これが学びの心構えや方法論の獲得に相関していると考えられるならば、重要なのは高校と大学での学びの違いを埋める導入教育・ブリッジ教育と考えられる。「学びの精神 (FH)」での分析によれば、2017年度も高校と大学での学びの違いは分かったものの、心構えができたと言えないと感じている学生が多い。また、Blackboardの使用方法や事前の注意、準備事項などを把握していない学生も多い。これは全学的な課題であるが、導入教育の強化を行い、学年の早い段階で大学での学び方を身につけてもらうことによって、授業の満足度と評価は向上するであろう。今後は、例えば、本学への進学者が多い高校と連携を行い、高校の段階からアクティブに学ぶ姿勢を理解してもらい、可能であれば中等教育を高等教育と無理なく接続できるような授業改善を高校側に提案すべきかもしれない。

三つ目は、やはり大教室における私語、スマホの使用など講義環境を悪化させるハラスメント行為をする学生の問題である。これは、全学的に明確な何らかのメッセージを学生に向けて発信し、個々の教員がこうした問題に頭を悩まされないようにする必要がある。

4-13 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

教職課程は毎年度「講義科目を対象に1教員1科目」を原則として実施している。他の課程は重点的科目を絞って実施し、数年で全科目が該当するように計画している。これは継続的評価を行うことにより、各教員の改善・工夫、その評価について検討する資料となると考えているためである。なお、履修者が5名を下回った場合の実施の有無は、各課程の判断によっている。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

学校・社会教育講座（以下、講座）の回答率は79.46%と、全学平均の63.93%をはるかに超えており、異文化コミュニケーション学部（87.26%）に次ぐ高い数値を示している。このことは、講座の科目を履修した学生の出席率の高さを示している。また学年別回答者数の偏り、つまり1・2年生が多く3・4年生が少ない点は、1・2年生段階で講座科目を集中して履修しているためである。

次に、講座全体の集計結果について見る。

I「この授業への取り組み」において、I1「出席率」の平均値は94.22、I2「積極的な参加の評価は4.00以上、他は3.50以上であるが、I6の「授業時以外の学習時間」は0.97となっている。この点については、課題とすべき点である。II「授業の進め方」においては全項目で4.00以上であるが、最も低い結果のII7「板書のしかた」（4.03）については改善を要する。III「授業から得られたもの」においては、III1「新しい考え方・発想」・III2「専門知識」・III4「授業内容の現代に通じる普遍的意味」が4.00以上である一方、III3「自分で調べ、考える姿勢」が3.80と相対的に低い。これは、学士課程教育をベースにする高度専門職をめざす一方で、専門職として共有すべき基礎知識獲得に重点を置かざるを得ないという、講座科目の現代的特徴を反映する結果である。IV「総合評価」は全項目が4.00台であり、学生の評価は高い。多くの項目で数値が高いことは、各教員の一定の改善・工夫の結果を示す証であろう。「設問項目別の回答割合」を見ると、上記において4.00以上となっている項目については、70%以上の学生が高い評価を示している。

「授業規模別平均値」では全ての項目において、50名以下の科目の方が51～100名・101～150名の科目より評価が高かった。なお、151名以上の科目はなかった。例えば、IV4「授業の満足度」では50名以下=4.47、51～100名=4.00、101～150名=4.03であった。ただし、101～150名の該当科目は3科目のため、科目の特性が強く出ている可能性がある。

「学年別平均値」は1年次=4.03、2年次=4.27、3年次=4.45、4年次=4.32（IV4「授業の満足度」）というように、1～3年次は学年進行に従って評価が高くなり、4年次で評価が下がる傾向が多く項目において見受けられる。

「課程別平均値」を見ると、全23項目中15項目において教職課程が他の課程より高く評価されていた。ただし、学芸員課程と司書課程は該当科目がそれぞれ3科目のため、科目の特性が強く出ている可能性がある（社会教育主事課程は1科目のため、比較対象から除外）。また、教職課程と講座共通科目を比較すると、ほぼ全ての項目で教職課程の方が評価が高かった。

講座全体における各項目の相関では、IV「総合評価」において、IV4「授業の満足度」と

IV1「わかりやすさ」・IV2「授業目標の明確さ」・IV3「学問的興味」に強い相関が見られた。また、II「授業の進め方」・III「授業から得たもの」の全項目と、IV4「授業の満足度」と間に比較的強い相関が見られ、このことから教員側の授業の意欲的取り組み（II）が学生側の学習の課題達成（III）をもたらし、IV4「授業の満足度」を高めることが推察される。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が自らの授業に対する学生からの評価に理解を示しており、各項目における自己の評価との間に大きな懸隔はなかったことが読み取れた。また、各教員自身が自負する成果として、出席率の高さ（90%以上）、積極的な参加型の授業形態、基本的な知識獲得、学問的興味、ディスカッション・コメントペーパーの効用が記されている。課題としては、授業時以外の学習時間の少なさが述べられている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

参加型授業、グループワーク、リアクションペーパー、ロールプレイ、といった方法を取り入れた授業への評価が高い。また、視聴覚教材を使用する講義には高い評価が示されている。

多くはないが、板書のしかた、パワーポイントの提示法、レジュメの内容、出欠の取り方、遅刻者への対応、授業内容に対する授業時間数の少なさ等への意見が見られる。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

学生から高い支持を得ているアクティブ・ラーニング（ex. 参加型授業・グループワーク・ロールプレイ・フィールドワーク）や教材資料の創意工夫（リアクションペーパー活用・パワーポイント・スライド形式の資料提示・配付教材資料等）は、さらに積極的に展開しようとする所見が見られる。また、学生の不満（ex. 出欠遅刻の取り方・板書）・改善要求（教室規模を含む教育環境の問題・配付資料・映像資料のプリント化等）に対しては、それらを受け止め、検討するとされている。さらに、教職課程の科目では、「授業の受講姿勢（飲物・途中退出・消極的態度等）」を授業規律の課題として捉える所見もあった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

評価の低い点や「板書」・「視聴覚教材」の改善に向けた姿勢を示す所見が多い。さらに「授業時以外の学習」についての工夫を考えようとする教員が見られる。

4. 今後の改善に向けて

総じて個々の項目は、ほぼ4.00以上の高い評価が得られた。IV「総合評価」を前年度と比較すると、IV1「わかりやすさ」が4.23⇒4.30、IV2「授業全体の目標が明確」が4.20⇒4.26、IV3「学問的興味」が4.00⇒4.04、IV4「授業を受けて満足」が4.15⇒4.19といずれも上昇しており、各教員の改善努力が反映されたともいえる。

2016年度のアンケートのふりかえりを通して、教員側から授業における学生の学びの姿

勢に改善を求める課題があった。今年度は、アンケートにおいてリアクションペーパーを共有する双方向的・対話的学習方法自体への不満を事後的に訴える消極的な学習姿勢を示す学生コメントがあり、これに対して授業内容・思考の深化・対人関係重視の「職業としての教師」の学びの意義から、その消極性をいさめた教員の指導的所見が見られた。こうした指導を授業の応答関係の中でリアルタイムで行うことは、依然として重要課題であろう。

5. 2017年度のまとめと今後の展望

2018年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 山田 康之

2017年度の授業評価アンケートでは、本報告書 p.5 にあるように「学部等の必要性に応じた選定」により、対象となる科目を選定した。その結果、実施予定科目数は 1,058 科目となり、このうち 98.68%にあたる 1,044 科目で実施された。このような大規模なアンケートが滞りなく実施されたことについて、実施委員会として、実施に関わったすべての皆さまに感謝申し上げます。

アンケート実施率が非常に高いものとなっている一方、実施科目についての担当教員からの所見票提出率は 82.66% (863/1,044) に留まっている。所見票作成の意義、目的については、本報告書 p.3 にまとめられている通りである。毎年度実施している科目などで、担当教員がアンケート慣れ、アンケート疲れしてしまっている状況なども考えられるが、本アンケートは学生諸君の貴重な時間を割いて実施しているものであることを踏まえ、教員各位には改めてご協力をお願いしたい。なお、現状では 1 教員 1 科目での実施は 3 年に一度であり、それ以外の年度は「学部等の必要性に応じた選定」による実施となっている（本報告書 p.5）。学部等での実施科目選定の際には、それぞれの科目でのアンケート実施の必要性について十分な検討をお願いしたい。

各学部等における科目選定方針は、本報告書 pp.11-12 の一覧にあるように様々である。このため、学部等ごとの結果について比較することは容易ではない。詳細は p.21 からの各学部等総評をご参照頂きたい。一方で、多くの学部等に共通して、学生の勉学に取り組む姿勢（「授業時以外での学習時間」、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「授業をきっかけに発展的な勉強をした」）の改善が今後の課題として取りあげられている。これは 2004 年度に実施された、本学における初回の授業評価アンケートから一貫して見られる傾向である。担当教員の不断の努力や様々な取り組みによって、個々の科目レベルでは改善の見られているものも多くあろうが、大学全体としての改善は、なかなか進んでいないのが現状であると言わざるを得ない。このような現状に対し、学生の主体性に任せていては改善が見られないということであれば、学生が主体的に学ぶ姿勢を涵養するという立場とは相容れないが、成績評価につながる小レポートや宿題を課すなどの、ある程度強制力をもって勉強をさせるような、ある意味大学生向けとは言い難いやり方によってでも、学習時間を確保させることも、あるいは必要なのかもしれない。どのような対応が最善であるかは、科目の性質、担当教員の考え方などによっても異なると考えられる。教員各位には、本報告書のみならず、ぜひ各教員が執筆した所見票をご覧頂き（所見票閲覧システム <http://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomubu/etsuran/top.html> (要 V-Campus ID/パスワード))、他の教員の具体的な取り組みなどについて、情報を入手、活用して頂きたい。

近年、教育改革推進会議等において、授業中の私語による学習環境の悪化が話題となっており、実際に各学部等からの報告を見ると、担当教員が対応に苦慮している様子が伝わってくる。観光学部の総評に「教室の静粛性が保たれていない場合には、不規則な私語は周囲の学生の学習の権利を奪う行為であることを、教員が厳しく警告する必要がある。」とあるように、担当教員には毅然とした対応が望まれる。また、コミュニティ福祉学部からは「多様な工夫を蓄積する中で、徐々に静謐な授業環境が保たれるような効果が生まれた」可能性が指摘され、また全学共通カリキュラム運営センターからは、「視聴覚教材を効果的に使用したインタラクティブな学びが行われている場合、大教室でも静粛である傾向がある」ことが指摘された。これらの取り組みの具体的な内容についても全学的な共有を進め、良好な学習環境の実現へとつなげていくことが次のステップとして必要なことと考えられる。

本学で授業評価アンケートが開始されてから、14年が経過している。大学という教育の場を構成する教員、学生は年々入れ替わっており、また、大学を取り巻く環境も常に変化しているため、教育の質を維持・向上させるという意味で授業評価アンケートの継続的な実施は必須である。一方で、これまでの結果を踏まえた小さな改善の積み重ねは、既にある程度の水準に達しているようにも思える。経年変化を見るには、アンケートの実施形態や内容を大幅に変更することは難しいかもしれないが、どのような内容のアンケートをどのような形で実施することが、問題の把握、改善につながるのかを、現状に即して改めて検討する時期を迎えているのかもしれない。例えば Web による授業評価アンケートの実施は、かつて技術的な問題などから見送られたようだが、ICT 環境の大幅な進歩などに鑑み、改めて導入を検討してもよいかもしれない。

6. 2017年度集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 70,065名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文学部	11,010	7,335	66.62
経済学部	4,466	3,532	79.09
理学部	6,765	4,355	64.38
社会学部	17,513	10,081	57.56
法学部	1,794	723	40.30
経営学部	13,961	7,569	54.22
異文化コミュニケーション学部	793	692	87.26
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	152	98	64.47
観光学部	6,685	4,352	65.10
コミュニティ福祉学部	3,135	2,236	71.32
現代心理学部	3,589	2,506	69.82
全学共通カリキュラム運営センター	37,321	24,667	66.09
学校・社会教育講座	2,415	1,919	79.46
合計	109,599	70,065	63.93

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	その他	合計
文学部	3,189	2,105	1,337	591	113	7,335
経済学部	3,187	187	36	29	93	3,532
理学部	1,447	1,553	999	258	98	4,355
社会学部	3,115	3,224	2,566	898	278	10,081
法学部	1	144	350	219	9	723
経営学部	2,165	2,095	2,021	876	412	7,569
異文化コミュニケーション学部	520	117	20	5	30	692
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	73	8	3	3	11	98
観光学部	930	1,503	1,346	524	49	4,352
コミュニティ福祉学部	367	1,062	606	178	23	2,236
現代心理学部	534	1,187	569	178	38	2,506
全学共通カリキュラム運営センター	10,051	7,407	4,451	2,086	672	24,667
学校・社会教育講座	869	667	267	44	72	1,919
合計	26,448	21,259	14,571	5,889	1,898	70,065

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 「その他」は、本学学部生以外（本学大学院学生・特別外国人学生・特別聴講学生・科目等履修生等）と学年にマークがなかった不明者

注4) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	7,318	92.17	13.32
I 2 この授業に積極的に参加した	7,314	4.03	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,316	3.51	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,308	3.43	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,270	3.71	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	7,304	1.06	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,320	4.16	0.96
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,318	4.13	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,314	4.13	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,313	4.16	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,306	4.02	1.03
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,249	4.03	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	4,029	3.80	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	5,372	4.20	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,138	4.35	0.84
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,310	4.02	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,308	4.02	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,306	3.72	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,297	3.88	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,312	4.08	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,310	4.10	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,310	3.98	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	7,310	4.07	1.01
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,973	4.30	0.95
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,971	4.20	0.99

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	3,521	93.46	14.49
I 2 この授業に積極的に参加した	3,524	4.19	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,524	3.71	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,520	3.48	1.16
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3,502	3.46	1.14
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	3,516	1.27	1.11
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,523	4.03	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,523	4.04	1.04
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,521	4.05	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,520	4.07	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,513	3.88	1.12
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,501	4.02	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	2,498	3.88	1.10
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,634	4.00	1.05
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,462	4.16	0.97
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,517	3.77	1.04
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,518	3.92	0.97
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,518	3.71	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,510	3.76	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,517	3.98	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,516	4.02	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,514	3.79	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	3,517	3.90	1.07
V 学部等による設問			
V 1（全科目共通設問）教室の規模と設備は適切であった	2,795	4.24	0.94
V 2（基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	583	4.18	0.81
V 3（基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	579	4.34	0.75
V 4（情報処理系科目）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	590	4.24	0.86
V 5（情報処理系科目）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	594	4.15	0.92
V 6（情報処理系科目）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	594	4.21	0.86

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	4,342	92.41	14.85
I 2 この授業に積極的に参加した	4,342	4.12	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,336	3.58	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,332	3.47	1.12
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,320	3.59	1.08
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	4,328	1.34	1.05
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,339	4.00	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,337	3.97	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,338	4.03	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,332	4.05	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,331	4.17	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,316	4.07	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	3,711	3.91	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	3,011	4.10	0.97
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,268	4.23	0.90
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,331	3.92	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,330	3.98	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,328	3.82	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,328	3.71	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,331	3.94	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,326	4.01	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,326	3.84	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	4,322	3.92	1.02
V 学部等による設問			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,239	4.08	0.86
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,231	4.10	0.90
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	580	3.64	1.10
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,628	3.91	1.07

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用し算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	10,051	91.84	13.97
I 2 この授業に積極的に参加した	10,045	3.93	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,035	3.39	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,030	3.22	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	10,001	3.65	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	10,025	0.86	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,039	4.00	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,035	4.03	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,025	4.04	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,026	4.07	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,013	3.94	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,950	3.92	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	5,354	3.69	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,983	4.16	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,864	4.27	0.84
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,028	3.98	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,025	3.92	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,021	3.56	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,010	3.91	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,024	4.01	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,016	4.02	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,021	3.91	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	10,020	3.98	0.97

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	718	83.65	22.25
I 2 この授業に積極的に参加した	717	3.67	1.08
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	717	3.04	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	718	2.95	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	712	3.54	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	719	0.98	0.93
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	719	3.94	1.14
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	719	4.03	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	720	3.95	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	716	3.99	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	719	4.21	0.86
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	713	3.86	1.07
II 7 板書のしかたが適切だった	603	3.36	1.14
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	524	3.98	0.96
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	702	4.16	0.88
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	718	3.81	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	721	3.87	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	720	3.42	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	717	3.85	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	719	3.91	1.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	719	3.92	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	719	3.77	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	719	3.89	1.02

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	7,535	91.59	14.49
I 2 この授業に積極的に参加した	7,546	3.93	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,537	3.55	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,530	3.48	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,496	3.60	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	7,516	1.17	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,536	4.01	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,539	4.03	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,534	4.03	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,523	4.05	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,527	3.94	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,455	3.92	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	4,304	3.75	1.12
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,634	4.05	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,380	4.22	0.89
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,530	3.91	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,529	3.98	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,526	3.71	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,514	3.88	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,526	3.95	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,528	4.01	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,524	3.89	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	7,523	3.93	1.03

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	689	97.76	6.84
I 2 この授業に積極的に参加した	690	4.27	0.83
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	690	3.83	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	689	3.55	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	685	3.53	1.14
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	689	1.39	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	691	4.12	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	691	4.06	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	690	4.03	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	689	4.05	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	690	4.03	0.96
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	680	3.85	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	405	3.72	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	662	4.30	0.84
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	684	4.36	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	691	4.14	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	690	3.90	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	691	3.84	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	686	3.94	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	691	4.09	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	690	4.12	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	691	3.81	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	691	3.91	1.04

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	98	88.16	13.42
I 2 この授業に積極的に参加した	98	3.64	0.84
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	98	3.53	0.93
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	98	3.70	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	97	3.72	0.95
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	98	1.22	0.87
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	98	3.82	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	98	4.13	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	98	4.07	1.11
II 4 各回の授業内容は明確だった	98	3.95	1.14
II 5 十分な静粛性が保たれた	98	3.59	1.18
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	98	3.72	1.14
II 7 板書のしかたが適切だった	81	3.84	1.11
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	96	4.14	1.01
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	97	4.36	0.83
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	98	3.96	0.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	98	4.04	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	98	3.91	0.95
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	97	4.00	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	98	3.77	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	98	3.94	1.07
IV 3 学問的興味をかきたてられた	98	3.83	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	97	3.82	1.10

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	4,347	91.07	14.10
I 2 この授業に積極的に参加した	4,346	3.94	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,339	3.40	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,336	3.23	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,329	3.79	0.93
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	4,335	0.83	0.94
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,345	4.09	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,346	4.12	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,345	4.10	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,340	4.14	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,337	4.17	0.90
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,311	4.04	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	2,655	3.81	1.04
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	3,633	4.22	0.89
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,261	4.36	0.78
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,343	3.98	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,344	4.00	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,346	3.57	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,339	3.90	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,342	4.05	0.99
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,342	4.07	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,340	3.93	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	4,339	4.03	0.95

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表12 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,232	91.62	13.65
I 2 この授業に積極的に参加した	2,232	3.99	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,232	3.50	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,229	3.31	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,223	3.72	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,229	0.86	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,231	3.99	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,231	4.00	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,230	4.04	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,227	4.09	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,228	4.17	0.91
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,209	3.99	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	1,123	3.76	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,075	4.16	0.96
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,175	4.27	0.89
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,227	3.97	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,227	3.99	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,227	3.63	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,225	3.91	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,226	4.00	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,225	4.06	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,226	3.91	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	2,225	4.00	1.00

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 3 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,501	91.73	12.88
I 2 この授業に積極的に参加した	2,502	3.92	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,502	3.29	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,501	3.16	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,483	3.77	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,498	0.73	0.90
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,499	4.11	0.94
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,500	4.07	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,498	4.07	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,494	4.11	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,495	4.17	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,464	4.04	0.96
II 7 板書のしかたが適切だった	1,397	3.71	1.00
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,152	4.30	0.80
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,439	4.38	0.74
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,498	4.05	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,497	3.94	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,497	3.51	1.08
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,496	3.79	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,498	4.00	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,499	4.05	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,496	3.93	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	2,497	4.03	0.97
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	2,436	4.18	0.90
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	2,432	4.23	0.87
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	2,422	4.06	0.89

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 4 全学共通カリキュラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	24,601	92.08	13.37
I 2 この授業に積極的に参加した	24,615	4.00	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	24,588	3.38	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	24,558	3.26	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	24,455	3.70	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	24,561	0.85	1.00
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	24,607	4.11	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	24,606	4.12	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	24,591	4.11	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	24,566	4.15	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	24,560	4.08	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	24,345	4.03	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	13,240	3.78	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	22,023	4.26	0.91
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	24,129	4.36	0.81
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	24,582	4.04	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	24,575	3.93	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	24,568	3.56	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	24,537	3.88	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	24,562	4.07	0.99
IV 2 授業全体の目標が明確だった	24,553	4.08	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	24,554	3.96	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	24,553	4.04	1.00
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	22,585	4.18	1.01
V 2 この授業の受講者数は適切だった	22,540	4.17	0.94
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	22,423	4.23	0.89
V 4 【学びの精神のみ対象】この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた	6,176	4.13	0.97
V 5 【学びの精神のみ対象】この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた	6,166	3.84	1.05
V 6 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください）	—	—	—

⑤1 次抽選登録 ④2 次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表15 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	1,917	94.22	10.87
I 2 この授業に積極的に参加した	1,919	4.11	0.89
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,919	3.58	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,913	3.50	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,905	3.79	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	1,915	0.97	0.99
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,915	4.34	0.88
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,916	4.26	0.88
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,915	4.25	0.88
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,916	4.29	0.87
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,916	4.32	0.94
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,903	4.27	0.87
II 7 板書のしかたが適切だった	1,331	4.03	0.96
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,670	4.34	0.86
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,886	4.45	0.78
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,917	4.18	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,917	4.14	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,916	3.80	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,913	4.05	0.93
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,915	4.30	0.89
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,916	4.26	0.89
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,917	4.04	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	1,917	4.19	0.95

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

6-3 「グループ集計」科目一覧

表 1 6 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期
14	基礎ゼミナール1	春学期
15	基礎ゼミナール1	春学期
16	基礎ゼミナール1	春学期
17	基礎ゼミナール1	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	情報処理入門1	春学期
2	情報処理入門1	春学期
3	情報処理入門1	春学期
4	情報処理入門1	春学期
5	情報処理入門1	春学期
6	情報処理入門1	春学期
7	情報処理入門1	春学期
8	情報処理入門1	春学期
9	情報処理入門1	春学期
10	情報処理入門1	春学期
11	情報処理入門1	春学期
12	情報処理入門1	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	統計学1	春学期
2	統計学1	春学期
3	統計学1	春学期
4	統計学1	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	経済学1	春学期
2	経済学1	春学期
3	経済学1	春学期
4	経済学1	春学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	経済学2	秋学期
2	経済学2	秋学期
3	経済学2	秋学期
4	経済学2	秋学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	簿記2	秋学期
2	簿記2	秋学期
3	簿記2	秋学期
4	簿記2	秋学期
5	簿記2	秋学期
6	簿記2	秋学期
7	簿記2	秋学期
8	簿記2	秋学期
9	簿記2	秋学期
10	簿記2	秋学期

表 1 7 理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	生物化学1(生命)	秋学期
2	分子細胞学1	秋学期
3	生物学序論	春学期
4	化学序論	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	生物物理学1(生命)	秋学期
2	分子生物学1	春学期
3	分子生物学2	秋学期
4	生物化学2	春学期
5	基礎化学2	春学期
6	分子細胞学2	春学期
7	科学英語1(生)	春学期
8	生命倫理	秋学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	分子生物学3	春学期
2	分子細胞学3	春学期
3	分子神経学	秋学期
4	分子免疫学	春学期
5	分子発生生物学	秋学期
6	バイオインフォマティクス	春学期
7	生物統計学	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	生物化学1(生命)	秋学期
2	分子細胞学1	秋学期
3	生物学序論	春学期
4	化学序論	春学期
5	生物物理学1(生命)	秋学期
6	分子生物学1	春学期
7	分子生物学2	秋学期
8	生物化学2	春学期
9	基礎化学2	春学期
10	分子細胞学2	春学期
11	分子生物学3	春学期
12	分子細胞学3	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	分子生物学1	春学期
2	分子生物学2	秋学期
3	分子生物学3	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	生物化学1(生命)	秋学期
2	生物化学2	春学期
3	基礎化学2	春学期
4	生物物理学1(生命)	秋学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	分子細胞学1	秋学期
2	分子細胞学2	春学期
3	分子細胞学3	春学期
4	分子神経学	秋学期
5	分子免疫学	春学期
6	分子発生生物学	秋学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	生物学序論	春学期
2	化学序論	春学期
3	科学英語1(生)	春学期
4	バイオインフォマティクス	春学期
5	生物統計学	春学期
6	生命倫理	秋学期

表 18 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	経営学入門	春学期
2	経営学入門	春学期
3	経営学入門	春学期
4	経営学入門	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	経済学入門	春学期
2	経済学入門	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	会計学入門	春学期
2	会計学入門	春学期
3	会計学入門	春学期
4	会計学入門	春学期
5	会計学入門	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論B	秋学期
2	ビジネス概論B	秋学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論A	秋学期
2	ビジネス概論A	秋学期
3	ビジネス概論A	秋学期

表 19 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	言語・コミュニケーション研究入門	春学期
2	言語・コミュニケーション研究入門	秋学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	グローバル・スタディーズ研究入門	春学期
2	グローバル・スタディーズ研究入門	秋学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	春学期
2	Cultural Exchange	春学期
3	Cultural Exchange	春学期
4	Cultural Exchange	春学期
5	Cultural Exchange	春学期
6	Cultural Exchange	春学期

大学教育開発・支援センター（2018年9月現在）

センター長 栗田 和好（理学部）

教学IR部会

部会長 一ノ瀬 大輔（経済学部）
東 條 吉 純（教務部長、法学部）
山 口 和 範（経営学部長）
大 澤 敏 彦（教務部 教務事務センター）

事務局 総長室 教学改革課

2017年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 河 村 賢 治（教務部副部長、法務研究科）
遠 藤 裕 子（総長室 教学改革課）
佐 藤 百 恵（総長室 教学改革課）
伊 藤 明（教務部 教務事務センター）
椿 ま り（教務部 教務事務センター）

2018年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 山 田 康 之（教務部副部長、理学部）
澤 村 亜生津（総長室 教学改革課）
佐 藤 百 恵（総長室 教学改革課）
伊 藤 明（教務部 教務事務センター）
新 井 努（教務部 教務事務センター）

2017年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2018年9月発行

編集 立教大学 2018年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

e-mail cdshe@rikkyo.ac.jp

